

東京神学大学大学院 修士論文

波多野保夫

論文題： PC(USA) その歴史的・神学的考察

— 信仰告白に表明された聖書理解

専攻： 組織神学（歴史）

指導教授： 棚村 重行教授

提出日： 2012年09月14日

## 目次

はじめに.....	1
1. PC(USA) はどのような教会か.....	1
1. 1. 219回全国大会（2010年）.....	1
1. 2. PC(USA) の教勢統計.....	3
1. 3. 主要提案に関する議論.....	4
2. PC(USA) の歴史.....	9
2. 1. PC(USA) 通史.....	10
2. 2. PC(USA) 信仰告白史.....	23
2. 3. PC(USA) の周辺史.....	33
2. 4. PC(USA) に影響を与えた神学思想.....	38
2. 5. 予定の教理.....	44
2. 6. PC(USA) の歴史は語る.....	50
2. 7. なぜ保守的教会は成長するのか.....	52
3. PC(USA) の将来.....	55
3. 1. 220回全国大会（2012年）.....	55
おわりに.....	56
文献表.....	57

はじめに

日本の多くの教会が会員の減少と高齢化の問題に苦しんでいる。私は、幼少の頃より長老教会の伝統の中で育てられ、また教会に仕える喜びを与えられて 63 歳の今日にいたったが、長老教会もまた同じ問題に苦しんでいる。

東京神学大学入学以前、2000 年頃から 2009 年まで米国長老教会の礼拝に出席する機会が何回か与えられた。そこで、多くの老若男女が共に集い主日に複数の礼拝が大きな喜びを持ってささげられている姿を目の当たりにした。

日本のプロテスタント教派の多くは、米国のミッションにより伝えられており、150 年ほど前の米国長老教会の信仰が日本において発展して行った経緯は、多くの研究者によって解明されつつある。一方、ルーツである米国長老教会もまた歴史を刻んでいる。その歩みを歴史的・神学的にとらえることは、日本の教会が進むべき道に何らかの示唆を与えてくれるのではないかと期待する次第だ。

本論文では、現在米国最大の長老教会である Presbyterian Church(U.S.A.) (以下 PC(USA)) を中心にして読み解きたいと思う。

## 1. PC(USA)はどのような教会か

PC(USA)とはどのような教会であり、どのような課題をかかえ、どのような信仰理解をしているのか、219 回全国大会での議論と議決事項を見ることで始めたい。

### 1. 1. 219 回大会 (2010 年) <sup>1</sup>

#### 1. 1. 1. 219 回大会における主要な議決事項

次の主要案件が可決され、各中会の承認投票に付されることとなった。

##### 1. 按手基準の変更

『規則集』<sup>2</sup> G-6.0106b から「男女間の結婚の契約における忠誠、若しくは、独身における純潔」の語句を削除し、「按手を必要とする務めの基準は、生活のすべての面においてイエス・キリストの統治を喜んで現す教会の望みを反映する。按手および(または)招聘に責任を負う機関は、各候補者の職務に対する召命、賜物、準

<sup>1</sup> 219th General Assembly (2010), <http://ga219.pcusa.org/> 2011.10.21. 2010 年 7 月 3 日から 11 日までミネソタ州ミネアポリスで開催された 219 回大会での決定事項に関する Q&A、決定事項、議事録が収録されている。

<sup>2</sup> *Book of Order - The Constitution of the Presbyterian Church (U.S.A.) Part II 2009/2011*, The Office of the General Assembly, 2009.

構成は G : Form of Government, W : Directory of Worship, D : Rules of Discipline から成る。

備および適応性を審査する。その審査は、按手と任職に対する『規則集』上の全ての要求事項を満たすため、それだけに限定されるものではないが、候補者の能力と献身の志の確認を含む。審査機関は個々の候補に基準を適用する際、聖書と信仰告白によって導かれねばならない。」とする提案だ。<sup>3</sup> これは、性的振舞いに関する忠誠もしくは純潔の維持が、もはや按手や招聘の基準とならないことを意味する。

## 2. 信仰告白に関して

ベルハー信仰告白の採用と、ハイデルベルク信仰問答 問い 87 の翻訳に関する検討開始が可決された。前者は、『信仰告白集』<sup>4</sup> に既存の、ニカイヤ信条、使徒信条、スコットランド信仰告白、ハイデルベルク信仰問答、第二スイス信条、ウェストミンスター信仰告白、小教理問答、大教理問答、バルメン宣言、1967年信仰告白、PC(USA)の短い信仰の表明、に加え、第12番目の信仰告白として、ベルハー信仰告白を加えるものだ。信仰告白の採用には、2/3以上の中会の承認と次回220回大会(2012年)での承認を必要とする。

## 3. PC(USA)の統治機構に関する諸変更 省略

### 1. 1. 2. 議決に対する反対派の見解

ヒューストン第一長老教会が公表した反対意見<sup>5</sup> は次の6項目に要約される。

1. 大会は「按手候補の適正判断をローカルな統治機関に委ねる。」とした。この決定は、結婚における貞節と独身における純潔の要請に反する恐れがある。

2. 大会は、不完全で、曖昧で、解釈の大幅な余地を残し、按手のための既存の基準と一致しない、『規則集』の「統治機構」に関する修正案を可決承認した。

3. 大会は、『信仰告白集』にベルハー信仰告白を加える修正を可決した。この信仰告白は聖書の権威を認めず、伝統的な「平和、一致および純潔」のバランスの中で「一致」をより重視し、教会内の既存の道徳基準をむしろ弱くしている。

4. 大会は、教会の負担金を増加し同性のパートナーを持つPC(USA)職員の健康保険と年金に用いる年金計画委員会案を「推進する」とした。

<sup>3</sup> Ordination Standards [www.pcusa.org/media/uploads/ga219-photos/aib-2010-forprint.pdf](http://www.pcusa.org/media/uploads/ga219-photos/aib-2010-forprint.pdf) 2011.04.11 牧師の按手は中会が、執事と長老の按手は各個教会長老会が執行するため、審査機関と表現されている。

<sup>4</sup> *The Constitution of the Presbyterian Church(U.S.A.) Part1 Book of Confessions, The Office of the General Assembly, Louisville, 2007.*

<sup>5</sup> Session Resolution First Presbyterian Church, Houston <http://www.fpchouston.org/downloads/items/28.pdf> 2010.09.21.

5. 大会は、結婚に関する聖書と歴史の教えるところを保持するとしたが、「同性婚およびキリスト教の結婚の問題を検討する特別委員会」の多数意見報告書と反対意見報告書の双方を検討すると決定した。反対意見報告書は、結婚についての従来の聖書の理解を支持している。しかし、「男性と女性の間の結婚の契約内の厳守」と言う伝統的かつ聖書的な按手基準に挑戦する新しい提案の根拠として、将来の大会においてこの決定が利用されるのではないかと懸念される。

6. 大会は、ハイデルベルク教理問答の(特に)Q 87 の翻訳問題を検討するための作業を承認した。現在、Q 87(救済への悔いあらためへの必要について)は第一コリント書 6:9-10 を引用し、罪の一つとして「同性愛」を含んでいる。新しい用語は同性愛の慣習を受け入れる言葉に変更されるのではないかと懸念される。

このように、同性愛をめぐる大きな対立がある。この問題は米国の長老教会を過去 30 年間に渡って悩まし続けてきた。<sup>6</sup> 特に按手の問題にどのように向き合うかを通して、聖書の読み方と福音理解の違いが顕在化しているといえる。

### 1. 1. 3. 中会による大会議決事項の承認投票結果<sup>7</sup>

議決事項は、2011 年 6 月を期限として各中会の承認投票に付された。

按手基準(G-6.0106b)の変更	94 対 74 で承認 <sup>8</sup>
ベルハー信仰告白の採用	108 対 63 で 2/3 を越えず不承認
他の 16 項目の機構変更	全て承認

### 1. 2. PC(USA)の教勢統計

PC(USA)は 1983 年南部諸州に位置した The Presbyterian Church in the United States(PCUS)と、全米各州に位置した United Presbyterian Church in the United States of America(UPCUSA)との合同で形成され会員数は 420 万人に達した。しか

<sup>6</sup> 大会議長(Moderator of General Assembly)から PC(USA)所属全教会宛ての手紙。  
<http://www.presbyteryeasttn.org/documents/10-AchurchwideltrFINAL050511.pdf>  
2012.04.06.

<sup>7</sup> 大会議決事項の中会承認投票最終集計結果。  
<http://www.pcusa.org/resource/ga219-voting-tallies-proposed-amendments/> 2012.04. 03.

<sup>8</sup> *PC(USA) relaxes constitutional prohibition of gay and lesbian ordination.*  
<http://www.pcusa.org/news/2011/5/11/pcusa-relaxes-constitutional-prohibition-gay-and-l/>  
2012.04.03.

G-6.0106b 同性愛者の按手禁止規定は 1978 年に導入され、以後 3 回削除案が大会での承認後中会の投票に付されたが、1997 年は 114-57 で、2001 年は 127-46 で、2008 は 95-78 で否決された。今回承認された原因として、反対する教会の離脱、アメリカ社会が同性愛関係に寛容になり同性婚を認める州が出てきた、長期に及んだ議論を終えたい風潮などが指摘されている。

し 2010 年には、陪餐会員数 2,016,091 人、10,560 教会となり前年に比し 61,000 人減少した。長期間会員減少が続き困難の内にあると報告されている。<sup>9</sup>

### 1. 3. 主要提案に関する議論

#### 1. 3. 1. ベルハー信仰告白の採用 (『信仰告白集』への追加)

1980 年当時、南アフリカ改革教会(Reformed Christians of South Africa)はアパルトヘイト体制に基づいて、白人移民の子孫・アジア移民の子孫・混血者たち・黒人たちの 4 つに分かれていた。そしてその母教会は、聖書にもとづいてそれぞれの人種がそれぞれの文化をもって独自に発展するのは良いことだとし、アパルトヘイトを容認していた。ベルハー信仰告白は 1982 年に起草され、オランダ改革宣教会(DRMC)は、「この信仰告白は、アパルトヘイトによって福音の真実が危うくなった既存の信仰告白を補い得る」とし、1986 年公式に採用した。この告白の影響はアフリカ南部に留まらず、世界の教会に対して「すべての人々の一致と教会の一致」、「教会と社会の和解」、および「神の正義」と言う 3 つの重要な問題を投げかける。Reformed Church in America (RCA)では 2009 年大会(General Synod)において採択され、中会の投票を経て 2010 年大会で採用された。<sup>10</sup>

PC(USA)においては、216回大会(2004年)での調査特別委員会報告と、218回大会(2008年)での特別委員会を設置しての研究開始決議を持って準備された。219回大会では、1980年代に分裂状態にあった南アフリカの改革教会を統合へと導いたことから、教会の一致と、信仰深くあることが困難な状況にある今日のキリスト教徒の信仰を力強く心に触れる方法で表現するものであると評価し、さらに米国の教会にはさして遠くない過去に、アフリカ系米国人を白人の礼拝と聖餐から遠ざけた歴史があるとして、ベルハー信仰告白の採用が求められた。<sup>11</sup>

この信仰告白の性格を、肯定的評価と否定的評価双方から見ていく。

#### ・肯定的評価

先に記したように、RCA は 2010 年に既存の信仰告白 (使徒信条、ニカイヤ信条、アタナシウス信条、ハイデルベルク信仰問答、ベルギー信仰告白、ドルト信仰基準

<sup>9</sup> 大会書記長(Stated Clerk of General Assembly)発表による 2010 年度統計

<http://www.pcusa.org/news/2011/7/1/stated-clerk-releases-pcusa-2010-statistics/> 2010.12.30

<sup>10</sup> Reformed Church in America, the Belhar Confession,

<https://www.rca.org/sslpage.aspx?pid=304> 2012.04.12.

<sup>11</sup> 10-02 CONFESSION OF BELHAR On Amendment The Book of Confessions

<http://www.presbyteryeasttn.org/documents/ProposedBookofAmendmentsPart2Belhar.pdf>  
2012.04.12.

に加えた。RCAの宣教師ウェイン・A・ジャンセンは、ベルハー信仰告白が包括的であることを強調することから、教会の一致よりも分裂の危機をはらむ（特に同性愛問題）ことを指摘しつつも、「新しい世代に礼拝を親しみやすくするための一歩である」と評価する。さらに「RCAの歴史的な六つの信仰告白は神学的に深められている一方、現代特有の問題に対しては、それら自身の言葉では何も発言しない」とし、さらに「この告白は、私達がどんなに努力しても為しえないことをイエスに求める必要を、十分確信させる。」と評価する。<sup>12</sup>

・否定的評価

ベルハー信仰告白がなされた当時の南アフリカにおける必要性を認めつつ、次の4点において、『信仰告白集』への採用を否定する。

1. キリストの神性を告白する点において不十分であり（他の点は全てこれに由来する）、ベルハー信仰告白において強調されている教会の一致が、必ずしもキリストの神性に結びついていない。

2. 同性愛者の按手を認めることに積極的な人々がその根拠にベルハー信仰告白を挙げている。

3. イスラエル・パレスチナ紛争においてイスラエル側の人種差別だとの主張をアパルトヘイトに重ねる主張がなされる。

4. 「教会」の語を数箇所「神の民」と表現しているが、これはユダヤ教やイスラム教まで拡大可能な語であり、イエス・キリストの神性を軽視し多元論につながる。<sup>13</sup>

反対派の否定的見解は、「キリストの神性」が薄弱とするが、主な主張は同性愛に関する点にある。因みにベルハー信仰告白には「教会」の語が21回用いられているのに対し、「神の民」は2回だ。

ここで、マッキムの述べるPC(USA)の信仰告白理解を見ておきたい。

「信仰告白は聖書に明かされていると信じるものの表現であり、今後追加される可能性がある。その場合、新しい告白は、重大なキリスト教信仰の問題に取り組むために新しく相応しい用語が使用されるだろう。改革長老教会の伝統は生きた成長する伝統だ。私たちは今日まで私たちを導いて来た、神学の真理を告白し続けると共に、つねに新たな神の言葉を聞こうと努力する。」<sup>14</sup>

<sup>12</sup> ウェイン・A・ジャンセン「南アフリカから私たちへの贈り物」『神学』70号 2008年 pp294-311.

<sup>13</sup> Viola Larson, *Four reasons the PCUSA should not adopt Belhar Confession*, <http://www.layman.org/news.aspx?article=27188> The Layman Online 2010.04.12..

<sup>14</sup> Donald K. McKim, *More Presbyterian Questions, More Presbyterian Answers*

PC(USA)はすでに 11 の信仰告白を採用しているが閉じてはいない。さらに追加するこの試みに、移り行く時代の中であって聖書を新たに読み直し告白していく可能性を保持する教派的特徴を読み取る事ができる。

### 1. 3. 2. 同性愛者問題への対応

同性愛者に関する問題の扱いは、多くの主流派プロテスタント教会(Mainline Church)を悩ませている。教会員として礼拝に招くことを多くの教会は問題としないが、牧師・長老・執事への任職は認めていない。さらに、同性婚に対する教会の態度も問われている。

219 回大会（2010 年）は、「同性婚とキリスト教徒の結婚についての特別研究委員会」の多数意見報告と反対意見報告の双方を承認した。両者はまったく異なる結論に至るが、「神が参加された以上、分裂は許されない」として、真剣な神学討論がなされ、結果が報告された。<sup>15</sup>

提出された多数意見報告書<sup>16</sup>と反対意見報告書<sup>17</sup>では、両者の聖書解釈は大きく異なる。この対立は、「この世に対する神の働きかけに関する聖書解釈が一致するまで続くであろう」とまで言われる。

「按手基準の変更」(p1-2)は、ヒューストン第一長老教会の懸念(p2-3)に現わされているように、この同性愛者に関する問題の具体的表現である。この議案が賛成 373 反対 323 の小差で可決されたことは、多数意見と反対意見が半ばしており、解決の困難さを感じさせる。両意見報告の要点を整理し表-1 に示す。

---

- *Exploring Christian Faith*, Geneva Press, 2011 p4.

<sup>15</sup> 219<sup>th</sup> General Assembly(2010), *Civil union and marriage issues questions and answers* <http://ga219.pcusa.org/news/2010/7/14/civil-union-and-marriage-issues-questions-and-answ/> 2010.12.29.

<sup>16</sup> *The Final Report of the Special Committee to Study Issues of Civil Union and Christian Marriage to the 219th General Assembly (2010) Presbyterian Church (U.S.A.)* <https://www.pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3333&promoID=168> 2010.12.30.

<sup>17</sup> *The Final Report of the Special Committee to Study Issues of Civil Union and Christian Marriage to the 219th General Assembly (2010) Presbyterian Church (U.S.A.)* <https://www.pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3335&promoID=170> 2010.12.30.

表－1 同性愛者按手に関する特徴的意見

多数意見 (進歩主義者)	反対意見 (伝統主義者)
<p>「自由」「進歩的」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特定の戒律より重要であると見なす愛および公正の大原則に注目する</li> <li>・人間の歴史と世界中の地域における結婚概念の変わりやすさを強調する</li> <li>・結婚の核心的意味は固定されず、自然に必要なときに発展するとする</li> <li>・様々な聖書の記述と結婚に対する教会の姿勢の間の矛盾を強調する傾向がある</li> <li>・聖書記者は、家長制度や他の不正によって歪んだ社会で普及していた制限のある文化的展望のとりこであった</li> <li>・性に関しより多くの科学的知識を持っている近代社会へ、古代の近東で始まった性の基準を適用したくない</li> <li>・過去において男性優位であったことが、両性間の区別において批判されるのではないかと心配する傾向がある</li> <li>・性別差を考慮する従来の結婚の概念を再構成するための根拠としてパウロの「キリストにおいて、もはや男も女も無い」(ガラテヤ 3:28) との宣言を用いる</li> <li>・配偶者の生物学的とか社会的な性は結婚と無関係の要因であるべきとする</li> <li>・他の種類の誓約による性的関係に関して開いている傾向がある</li> </ul>	<p>「福音的」「保守的」「正統的」「伝統的」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同性関係を断定的に禁止するように見える特定の聖書の戒律に注目する</li> <li>・神の創造によって確立された結婚の核心的意味を強調する</li> <li>・結婚の普遍性を、ほとんどすべての既知の文化の中での神の創造における設計の確認と見なす</li> <li>・結婚の核心的意味を変更することは教会か社会のいずれかにおける愚行とみる</li> <li>・神の与える靈感によって、聖書記者と教会の歴史を通じ、結婚に関する一貫した教えが入念に作られたと見なす傾向がある</li> <li>・今日、それが形成された社会と違いや不整合があるにもかかわらず、教会がその教えを直接適用できると信じる</li> <li>・神の創造の摂理の重要な部分として、2つの性別(男女)を見なす傾向がある</li> <li>・結婚を、社会的重要性へと2つの性が参加するユニークな機会と見る</li> <li>・罪がどれ程両性間の関係を曲げ、また、イエス・キリストの恵みが、いかに男女間の正当な関係のために新しい可能性を開くかを認識し、共に結ばれる2つの補足的な性別を作る際に、キリストにおける神の恵みは、先行する神の恵みを無効にはしないと信じる</li> </ul>



<ul style="list-style-type: none"> <li>・この純潔の考えを時代遅れで役立たないものとする</li> <li>・かかわり方の形式や表現された肉体的行為よりも、愛、信頼、個人間の深い関係など、情緒的な内容により関心を持っている</li> <li>・性的嗜好を各人の個性が持つ基本的に払拭不可能な部分として見る</li> <li>・人は欲望に基づいて行動する可能性があり、その欲望は転換不可能とする</li> <li>・神がより大きな公正をもたらす時、しばしば、最初に社会に、それから教会にはたらかれるとする</li> <li>・奴隷制度、離婚および女性の按手の教えの変化は、性に関する教えの可能な変化の有効な先例となるとする</li> <li>・思いやりとは、それぞれの性的嗜好を誓約関係のもとに、責任を持って用いることを肯定することだとする</li> <li>・保護するためには、結婚と同性愛による関係の区別解消を求めることだとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・神の命令を制限ある選択肢のはっきりした提示とみる</li> <li>・結婚は人間の性の唯一の表現とみる</li> <li>・神の恵みへの道は、結婚の厳守か、独身で純潔を守るかのいずれかにある</li> <li>・聖書の主題として、クリスチャンが「聖霊の宮」である身体を清潔に保つ様求められていることを強調し、清潔を破ると考えられる同性愛の行為や婚外の性関係に反対する</li> <li>・性的衝動は根深いものと認めるが、個人が欲望に対処しうるとする</li> <li>・神の恵みによって、振る舞いや欲望を変化させることができると考える</li> <li>・奴隷制度、離婚および女性の按手のような問題について教会がその考えを以前に変えたことを認めるが、社会動向に一致するためでなく、聖書に対する新鮮な洞察力のために起こったと信じる</li> <li>・同性愛の問題は、聖書のあいまいさがずっと少ないので類似していないと見なす</li> <li>・同性愛の人への思いやりは、神の意図から外れたすべての異性愛者と共に、後悔と回復に呼び集めることにあるとする</li> <li>・保護するためには、破壊的な「性的関係の乱れ」(1967年の信仰告白 9.47)から遠ざかる様、社会に呼びかけることだとする</li> </ul>
---	--

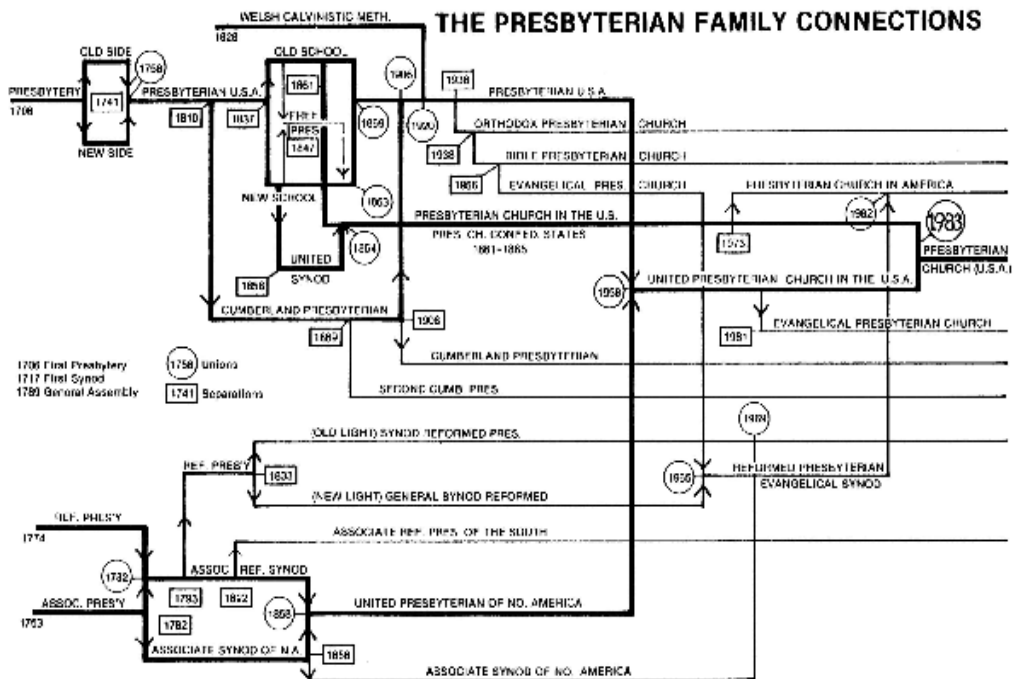
## 2. PC(USA) の歴史

米国における長老教会の歴史は、1706年フィラデルフィアに初の中会が設けられた時まで遡る。以来、PC(USA)のルーツたちは米国長老教会史の中心的位置を占めてきた。多くの信者がその礼拝に集い豊かな賛美をささげ、社会に対して大きな働きをなしてきたに違いない。しかしその歴史は、神学上の対立による分裂と和解による再合同であった。そこに働いたのは、激しい社会や文化の変化に対してどのように聖書を読みキリストの福音を理解し伝えるかの取組みであったと言える。

長老教会の変遷 (THE PRESBYTERIAN CONNECTIONS) を 図1 に示す。<sup>18</sup>

本章ではPC(USA)の歴史を、通史・信仰告白史・周辺史・神学思想史の4つの面からたどり、PC(USA)の現状をより深く読み解きたい。

図1 長老教会の変遷



<sup>18</sup> The Presbyterian Family Connections.

<http://www.history.pcusa.org/images/history/connection.pdf> 2012.05.10 Presbyterian U.S.A. とあるのは、Presbyterian Church in the United State of America(PCUSA) の省略。

## 2. 1. PC(USA) 通史<sup>19</sup>

米国長老教会の歴史を次ぎの四つの時代に分類し見ていくこととする。

第1の時代(1706-1789年)は、米国の独立期における大覚醒運動を背景とした旧新派の対立(Old Side-New Side Controversy)の時代であり、両者の再合同をもって閉じる。第2の時代(1789-1869年)は、米国の社会経済的発展と第2次信仰覚醒運動を背景とした旧派カルヴァン派と新派カルヴァン派の対立(Old School-New School Controversy)の時代であり、南北それぞれの旧新カルヴァン派の再合同をもって閉じる。第3の時代(1869-1983年)は、根本主義と現代主義の対立(Fundamentalism<sup>20</sup>-Modernism Controversy)の時代であり、南北の長老教会が再合同しPC(USA)の結成までとする。第4の時代(1983-2012年)では、現代に至る根本主義者と現代主義者の神学的対立が象徴的に現れている、同性愛者に関する問題を見る。

### 2. 1. 1. 第1の時代(1706-1789年) 旧派 - 新派の対立

1706年フィラデルフィア中会の結成から1789年の初の全国大会開催に至る植民地時代に、組織的な統合がなされ教会を管理する基礎的な規則が確立された。

1740年代前半に、ジョージ・ホイットフィールド、ジョン・エドワーズを中心に盛んになった信仰復興(大覚醒)運動<sup>21</sup>の影響を受け、旧世界からの信条主義に立つ旧派と、敬虔主義に立つ新派間の対立は、フィラデルフィア中会結成からわずか15年後の1741年から1758年まで、分裂の時代をもたらした。

1729年大会行動宣言(the Adopting Act of 1729)において、牧師就任時における信仰告白への署名の性質と価値に関する見解と、敬虔さに関する理解の差が顕在化した。スコットランド系、アイルランド系と南東ペンシルベニアの長老教会(Old Side 旧派)が、「署名は、牧師達が犯す誤りから教会を守るもの」と評価し歓迎した一方、ニュージャージーとニューヨークの、神学的にニューイングランドに近

<sup>19</sup> 2. 1. PC(USA)通史 は、正統長老教会(the Orthodox Presbyterian Church:OPC)の公式ホームページに掲載されている D. G. Hart and John R. Muether による *New Horizons Turning Points in American Presbyterian History*, (以下 *Horizons* と記す) <http://www.opc.org/> 2010.08.10. に多く依る。OPC はプリンストン神学校のリベラル化に際しウェストミンスター神学校を設立した、ジョン・グレッサム・メイチェンを指導者として1936年にPC(USA)の前進PCUSA から独立した、伝統的カルバン主義に立つ保守的教派。現在のPC (USA)に批判的である。棚村は、マタイ 18:16 を引き、複数証言の重要性を述べる。(棚村重行「二つの福音は山河をこえて」『神学73号』教文館 2011年 p.196) 他の証言を加え公平な記述をめざす。

<sup>20</sup> Fundamentalism は、根本主義、又は原理主義と訳されるが本論文では全て前者とした。

<sup>21</sup> 森本あんり『アメリカ・キリスト教史—理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社 2006年 pp47-52.

い長老教会（New Side 新派）は、「署名は、良心にキリストではなく人の言葉を結び付ける物であり、信仰の自由の侵害だ」とした。

1739年ジョージ・ホイットフィールドが訪米すると、彼の強力な説教は教会内外の論争を巻き起こし、大きな流れに変わった。（第一次信仰覚醒運動へ）

1739年と1741年の間に、「巡回牧師制」「牧師訓練（神学教育）」「按手資格」などに関する問題が生じた。信仰復興運動に反対だった旧派はそれ自体の問題を問わず、丸太大学ではカルヴァン主義の教義より実践の中での訓練や回心体験が重視されたため、その神学教育は疑わしく不十分だと反対した。対して、ギルガート・テナントら信仰復興運動支持者（新派）は、按手候補が回心経験の証拠を示すよう要求した。署名問題が対立に結びつけられた。

1741年5月に、新派は自身を新ブランズウィック中会と宣言し、丸太大学卒業生評価権は、もはやフィラデルフィア・シノッド（旧派）には属さないとした。この決定により、旧派と新派長老教会は分裂した。

分裂状態にあった17年間にも信仰復興運動は継続し、22名であったニューヨーク・シノッドの牧師数は3倍に増えた。<sup>22</sup>

しかし、関係者の多くが死亡したこともあり（テナントは1746年、エドワーズは1758年に死亡）1758年、再合同が成った。この合同は、旧派の署名に対する懸念、および教会役員と教会裁判所の正当な権威を認めたが、圧倒的に新派の信仰復興についての理解と、それによる敬虔さの重視とを支持した。牧師候補者は必要な神学を修めることに加え、福音的な「実際の経験」を実証しなければならないとし、さらに大覚醒運動が「聖霊の恵みの働き」であると宣言した。

トレーシーは、この合同において「新派が霊性を教会に強制しなかったことで、旧派は、アルミニウス主義の死の海のような無能さと、ユニテリアン主義の底なしの深みに落ち込むことから救われた」とし、「全ての問題となる教義は、まず無視され、信じられなくなり、やがて、教会の真の正統的“基準”は置き換えられるか、死文と見なされた」とする。<sup>23</sup>

米国の独立（1776年）に先立つこの時代、長老教会は急速な成長を遂げる一方、すでに霊性と知解に関する二つの異なる福音理解が存在していたことは注目に値する。1758年の再合同は結局、敬虔主義と信条主義の妥協と言う政治的で不安定なものであり、この影響は後の時代に及んでいく。

<sup>22</sup> Joseph Tracy, *The Great Awakening, a history of the revival of religion in the time of Edwards and Whitefield*, 1845 reprinted by Arno Press & The New York Times, 1969 p386

<sup>23</sup> *ibid.*, p388.

## 2. 1. 2. 第2の時代（1789-1869年）旧新カルヴァン派の対立

米国の独立期、初の長老教会大会（1789年）に先立つ1785年に、フィラデルフィアとニューヨークの合同シノッドはウェストミンスター信仰告白と信仰問答の改訂、統治機構と統制、そして礼拝基準の改訂を求めた。これは、キリストのみを教会の頭とし、国家的為政者の教会に対する権能を否定して、信仰の自由をその統治機構、神学そして礼拝に活かすものであった。これは教会的権威の下に国家に従属する国教会の立場を脱し得ないヨーロッパに比べ、より豊かに長老教会の伝統に立つことを可能とした。<sup>24</sup>

1801年の Presbyterian Church in the United States of America (PCUSA)大会は、ニューイングランド会衆派と開拓地伝道推進のための「合同計画」開始を決定した。プリンストン神学校が長老教会初の神学校として設立されたのは1812年であり、当時牧師数が絶対的に不足していた。「合同計画」は、確固とした全国組織をもたない会衆派を飲み込む側面を持ち、<sup>25</sup> 訓練されたニューイングランドの会衆派牧師と会衆派神学校の利用を可能とした一方、彼らのカルヴァン派神学の影響を受けた。例えば強力なカルバン主義養護者であったジョナサン・エドワーズはスコットランド・アイルランド系長老派の信条主義と全く異なり、教義の実経験を重んじた。その後の30年に於いてニューイングランドのカルヴァン主義は不安定となり、三位一体・原罪・贖罪を否定するユニテリアン運動が発生したり、会衆派にアルミニウス主義が入り込んだりした。

19世紀前半における、超カルヴァン主義とユニテリアン主義の代表的調停者は、スコットランドのコモン・センス哲学を受容し、ジョナサン・エドワーズの後継者を自任する、テイラー(Nathaniel William Taylor:1786-1858)<sup>26</sup>であり、第2次信仰復興の推進及び道德改革に寄与したニューヘブン神学を担った。彼は、「人の罪深さはアダムから相続した性質ではなく、人の罪深い行動により全ての人が罪を犯す」とした。<sup>27</sup> さらに「人は、自由意思を持ち自らの義務を為すべきであり、善悪を知りうる。人は、選びを拒否し愛し憎むことのできる意思もしくは心を持つ。

<sup>24</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *New Horizons Turning Points in American Presbyterian History Part 4: A National Presbyterian Church, 1789.*

[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=33](http://www.opc.org/nh.html?article_id=33) 2012.05.15.

<sup>25</sup> Roger Fink and Rodney Stark, *The Churching of America 1776-2005 - Winners and Losers in Our Religious Economy*, Rutgers University Press, 2005 pp74-76.

<sup>26</sup> Sydney E. Ahlstrom, *Theology in America The Major Protestant Voices from Puritanism to Neo-Orthodoxy*, Yale Univ. 1967 p213.

<sup>27</sup> Mark A Noll, *New Heaven Theology*, Bible Religious Information Source web-site

<http://mb-soft.com/believe/txc/newhaven.htm> 2012.06.05.

そして所持するだけでなくこれらを行使する。問題はそれをどのように用いるか、正しくか誤ってか、それを知らないことだ。」と説教において語っている。<sup>28</sup>

イエール大学での説教では、「全ての罪に先立つ罪と人間の罪深い傾向との区別は明確であり、人は本性に於いて完全に道徳的に墮落している。彼らは自らの自由な行為と選択によって罪を犯す。アダムがその本性において墮落したように、その子孫達も同様に自分の自由な意志によって墮落した。神の命令や働きによってさえ服従が期待できない彼らに告げるべきは怒りのメッセージだ。しかし、それはまた神の命令に従わない者に対する恵みのメッセージだ。これを伝えることによって牧者は神の同労者になり得る。」とした。<sup>29</sup>

ハートらは、テイラーよりも強く原罪の教理を否定しウェストミンスター基準を逸脱したとされるアルバート・バーンズ(1798-1870年)が戒規されることはなかったと述べる。では、彼はどのような罪理解をしたのか。聖書註解からロマ書5章12-21節を見ておきたい。

12節、「罪が一人の人によって世に到った結果死が続き、その死は啓示の光を持っていなかった者や、神のご命令を知らなかった者も含めて、全ての者に受け渡された」とし、続く長い註解で「罪とは神の法に対する違反行為を意味するが、ここで使徒パウロは原罪の教理を語っているのではない。最初の人には神の法に反し罪を犯し、これによって罪が人にもたらされ、それに従って死がもたらされた。そして4000年後の神の子の到来による神との断絶の回復が必要であった。全ての人は自ら罪を犯し死に値した。どうして罪を犯す方法が他に存在するだろうか」と結ぶ。<sup>30</sup>

さらに彼は説教において、「我々がアダムと同じ状況に立たされた場合、同じ罪を犯すであろうし、さらに我々にはアダムが従順であれば得たであろう栄光はもはや約束されていない」とし、キリストによる贖罪について語る。<sup>31</sup>

バーンズが否定したのは罪の遺伝であり、現代人も罪を犯すことにおいてアダム

<sup>28</sup> Nathaniel W. Taylor, *To Make Himself A New Heart, Practical Sermons by Nathaniel W. Taylor, D. D., American Religious Thought of the 18th and 19th Centuries*, edited by Bruce Kuklick, Garland Publishing, Inc., 1987.

<sup>29</sup> Sydney E. Ahlstrom, op.cit., pp213-249 : Nathaniel William Taylor, *CONICO AD CLERUM A Sermon On Human Nature, Sin and Freedom*, 1828.

<sup>30</sup> Albert Barnes, *HE EPISTLE TO THE ROMANS - Chapter 5 - Verse 12*, 1835.  
<http://www.ccel.org/ccel/barnes/ntnotes.ix.v.xii.html> 2012.06.06.

<sup>31</sup> Albert Barnes, "The Way of Salvation" と題する 1829 年の説教シリーズ。  
<http://www.biblestudytools.com/classics/barnes-way-salvation/> 2012.06.07. Barnes' New Testament Notes このうち SERMON VII "MAN ON PROBATION" に顕著。  
<http://www.biblestudytools.com/classics/barnes-way-salvation/sermon-vii.html> 2012.06.07.  
この説教は対話形式に書き改められ 1863 年に出版されている。  
[http://books.google.co.jp/books?hl=en&id=20MAAAAYAAJ&redir\\_esc=y](http://books.google.co.jp/books?hl=en&id=20MAAAAYAAJ&redir_esc=y) 2012.06.07.

とかかわらず、キリストの贖いを必要とする点においても同じだと述べている。

この様なニューイングランドのカルバン主義と、長老教会の伝統との乖離に危機感を覚えた保守派は、旧派カルバン主義(Old School Calvinism:OSC)を形作っていた。長老派と会衆派は米国独立後の高揚と発展の中、新天地での教会建設に協力し合った。しかし、両派の神学上の相違は解消されず OSC は 1837 年全国大会で新派カルヴァン主義(New School Calvinism:NSC)に立つ教会を締出し、会衆派との「合同計画」を解消した。この大会をもって OSC と NSC 両派は分裂した。<sup>32</sup>

ハートらはその状況を両派の神学的特徴とともに、以下の様に解説する。<sup>33, 34</sup>

OSC は、創造、聖書、安息日厳守・礼拝厳守に関しカルヴァン主義の立場にたち、NSC の救済論と教会論の次ぎの特徴点に反対した。<sup>35</sup>

1. NSC は、ニューイングランド清教徒の伝統の一部を受け継ぎ、アメリカの健全性が霊的安寧に依存すると信じ、信仰復興運動に社会的関心を混ぜ合わせた国家主義的外観を持つ
2. NSC は、キリスト教文明の利点を広めるため、禁酒や奴隷制廃止など道徳的改革を進める組織、聖書協会、教派に依らない宣教団体などを推進した
3. NSC は、カルヴァン主義神学を修正し、信仰復興運動と道徳的改革を支持する教義を作り上げた

この時代は、産業革命・都市化・共産主義思想の発展・奴隷制などが神学的に問われる激動期であった。長老教会では OSC が優勢であったが、OSC においても多くのプロテスタント宗派と同様、人間性への信頼（啓蒙主義）が神学に影響を及ぼした結果、神の真実を理解する際の聖霊の働きを軽視する傾向が生じていた。

1857 年 OSC 教会 (PCUSA)内の奴隷制廃止論についていけない、奴隷制度容認地域は離脱し United Synod of the PCUSA を結成した。

1861 年（南北戦争開始）OSC 教会の大会に於いて、ワシントンの合衆国政府に教会の権威を委ねる提案がなされた（ガーディナー・スプリングの決議案）。

C.ホッジ(Charles Hodge:1797-1878 年)は、ウェストミンスター信仰告白第 31 章 4

<sup>32</sup> OSC, NSC の神学的特長は、棚村重行『二つの福音は波濤を越えて— 十九世紀英米文明世界と「日本基督公会」運動および対抗運動』教文館 2009 年 pp110-139 に詳述。

<sup>33</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 6: Old School Presbyterianism, 1838* [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=21](http://www.opc.org/nh.html?article_id=21) 2012.05.23.

<sup>34</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 7: The Reunion of 1869* [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=13](http://www.opc.org/nh.html?article_id=13) 2012.05.23.

<sup>35</sup> Noll, op.cit.,は George Marsden, *The Evangelical Mind and the New School Presbyterian Experience*, 1970. を引用する。

項に反し<sup>36</sup> 教会の霊的業に政治を持ち込むものとして反対したが、決議案は広く支持された。南部の OSC 教会は離脱し Presbyterian Church in the Confederation States of America (PCCSA)を形成した。影響は南北の分裂にとどまらず、北部教会の政治社会的関心を高め、南部教会にその嫌悪感を植えつけたとされる。<sup>37</sup>

この時点で旧 PCUSA は旧新南北の 4 つに分裂した。

1864 年 (南北戦争終了の前年) 南部の新旧両派は再合同し Presbyterian Church in the United States (PCUS)を結成した。

1869 年北部の新旧両派も再合同し Presbyterian Church in the United State of America (PCUSA)を結成した。再合同は戦争の触媒効果すなわち、教派間協力とエキュメニカル運動の高まりによって実現されたのであり、神学的一致によらなかった。ネーサン・ビーマンらはアダムの原罪を否定し続けており、C.ホッジやサムエル・ブライドは NSC の寛容すぎる歴史から合同に反対したが、分裂から 30 年が経過しており、当時の議論を知らない牧師や長老が増え、彼らは少数派だった。

ここで、奴隷制度に関するプロテスタント教会の態度に触れておきたい。1619 年、ヴァージニアに定期就労者として連れて来られたアフリカ人達は、やがて強制的に奴隷とされていったが、どの教派も奴隷制度を問題視しなかった。

1688 年、プロテスタントの周辺部に位置したクエーカーやメノナイトは、奴隷の自由人となる権利を主張し始めたが、植民地全体に影響を与える力はなかった。奴隷をキリスト教化しより従順にするとの主張は、肉体労働の目的で所有されている奴隷が、直接聖書によりキリストの解放の福音や終末論を知ることであり、反乱を誘発する危険をはらむもので、南部プランテーション所有者の利害と対立した。<sup>38</sup>

北部 NSC 教会は早くから奴隷制に反対したが、聖書の記述に忠実であると曖昧な態度をとった OSC 教会もリンカーンの奴隷解放宣言以降同じ立場にたった。<sup>39</sup>

## 2. 1. 3. 第 3 の時代 (1869-1983 年) 根本主義 - 現代主義の対立

長老教会内において、根本主義と現代主義との論争が続いたが、主要テーマは、

<sup>36</sup> Posts Tagged, Gardiner Spring Resolutions (1861)

<http://continuing.wordpress.com/tag/gardiner-spring-resolutions-1861/> 2012.06.04.

<sup>37</sup> The Gardiner Spring Resolution, PCA Historical Center Archives & Manuscript Repository for the Continuing Presbyterian Church

<http://www.pcahistory.org/documents/gardinerspring.html> 2012.06.04.

<sup>38</sup> 増井志津代「多様と統一：植民地時代アメリカの宗教」

<http://www.info.sophia.ac.jp/amecana/Journal/17-5.htm> 2012.05.15.

<sup>39</sup> 独立宣言(1776 年)は「全ての人は平等に造られ創造主による生命、自由、幸福追求の権利を有する」と述べる。しかし、ネイティブアメリカンや黒人奴隷を含むものではなかった。



エキュメニズムと社会改革であり、社会に対する教会の責任と他教派との協力関係、さらに長老教会の伝統理解に関するものであった。再合同の直後から、ウェストミンスター告白は時代にそぐわないとし PCUSA 内で改訂を求める声が強まった。

OSC は、教理的厳密さよりも道徳的改善を重視する広教会主義や反告白主義の広がりをおそれた。C.ホッジを編集長とするプリンストンレビューは、19 世紀前半ドイツに起きた聖書高等批評の批判を続けたが、ドイツで学んだユニオン神学校のブリッグス(Charles A. Briggs 1841-1913 年)により米国内に広く紹介され一般に受け入れられていった。

1891 年ブリッグスはユニオン神学校聖書学主任教授への就任講演において、「私の見るところ、聖書にはまだ誰も取り去ることの出来ていない誤りと、原典にない全くの仮定が含まれている。」とし、無誤説<sup>40</sup> を否定した。これに対し大会は、1892 年「ポートランドの評決」を採択、「聖書は無誤であり、異なる見解を持つ者は教会を去るべき」とし、さらに 1893 年に彼を異端とした。

宗教改革者がローマ・カトリックとの戦いにおいて、唯一の信仰と生活の規範として聖書を位置づける *scriptura sola* と、聖書の完全性及び明快性の主張は一体のものであった。<sup>41</sup> C.ホッジは「聖書は平易で一般の人に理解でき、自ら読み、解釈しなければならぬ。信仰は、聖書の証言に基づくのであって教会にではない。」と述べる。これは、人間の良識は本質において信頼に足るとするスコットランド・コモンセンス哲学に基づいている。<sup>42</sup> アーチバルド・ホッジ(Archibald Alexander Hogde) とウォフィールド(B. B. Warfield)は、完全な聖書靈感の公同的教理に立ち、「聖書はただ神の言葉を含んでいるというだけでなく、神の言葉そのものであり、全ての要素と全ての主張は絶対的に誤り無く、人間の信仰と従順を拘束する事を確信する」とし聖書無誤説を主張した。<sup>43</sup>

この時点で旧派は勝利を収めたが、高等批評はさらに広く受け入れられ、ウェストミンスター信仰告白は時代遅れだとの気運が高まり 1903 年の改訂に至る。

同じ年、OSC は宗派を超えた保守派の同盟 Bible League of North America を設

<sup>40</sup> inerrancy 「無誤説」と訳す。マッキム編『リフォーメド神学事典』いのちのことば社 2009 年 p268 科学・歴史・地理における聖書の完全な正確さの主張を「無誤」とする。

<sup>41</sup> ウェストミンスター信仰告白 第 1 章 7 節は「無学なものも理解に達する」と記す。

<sup>42</sup> George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture New Edition*, Oxford University Press, 2006 p111 コモンセンス哲学は NSC のテラーも受け入れていた。(p12) 棚村重行 「恩寵と自由意思の逆説性喪失 (パラドックス・ロスト)」『神学』70 号 2009 年 pp246-247 脚注 11) 12) にコモンセンス哲学の説明と OSC, NSC 双方での受容者名がある。

<sup>43</sup> A. A. Hodge, B. B. Warfield, *The Presbyterian Review* 6 April 1881, p237.

<http://scdc.library.ptsem.edu/mets/mets.aspx?src=BR188126&div=1&img=13> 2012.06.14.

立したが、これはやがて教派を越えた根本主義者の集団となっていく。

1910年大会は、後に「根本主義の5点」(p28)として知られるようになる教義的判断を採択したが、マースデンらはこれを「保守的諸派の鮮烈な崩壊を前にした、最後の結集点」と呼ぶ。<sup>44</sup> 信仰告白のアイデンティティは左派において急速に、右派において徐々に薄まっていった。<sup>45</sup>

PCUSA（北部長老教会）における両派の争いは継続していたが、1914年に勃発した第一次世界大戦を背景に、根本主義派が現代主義派を駆逐する勢いだった。

1925年大会において、ニューヨーク中会での按手におけるユニオン神学校卒業生2名の処女降誕への同意拒否が問題とされ、ニューヨーク中会の離脱が確実視される事態に至った。しかし、「純潔・平和・一致・前進」を標榜する大会議長チャールズ R エルドマンの提案で検討委員会が設置され、一年に渡るメイチェンとコフインの激しい議論を経て、1926年大会にアメリカの長老主義が寛容でありかつ前進する為の2原則が報告された。

- ① 長老主義は核心となる真理が明確である限り、多様性を認める
- ② 教会はその違いを強調する傾向を横に置き、一致の精神に努める時、最も活き活きとかが鮮明に神のよき御手にあって栄える

最終報告は、1927年大会において承認され（反対は1票）次の結果をもたらした。

- ① ニューヨーク中会にキリストの処女降誕を教会の基本的信条とすることを拒否する自由を認めた
- ② オーバンにおける確認の署名者を正当化した
- ③ 大会における一致の強調によって、唯一のOSC神学校であるプリンストン神学校の内紛（新旧両派の勢力争い）が注目され改革が求められた。その結果プリンストン神学校はNSC神学となり1929年メイチェンはウェストミンスター神学校を設立するにいたった。<sup>46</sup>

1920年以降の根本主義者と現代主義者の対立において、3つの立場が存在した。保守派は神学的正統派であり教理による教会分裂を是とした。リベラルな現代派は神学的多元主義であり強く教会の一致を求めた。中間派は正統主義神学に立つが教会の分裂を望まず、教会政治的に一致の保てる範囲での多元主義を認め、正統主義

<sup>44</sup>Marsden, op.cit., pp117-118.

<sup>45</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 8: Confession Revision in 1903*  
[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=17](http://www.opc.org/nh.html?article_id=17) 2012.05.23.

<sup>46</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 9: The Special Confession of 1925*  
[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=17](http://www.opc.org/nh.html?article_id=17) 2012.06.01.

の中心となることを望んだ。中間派の動向が大きな影響を持つことになる。<sup>47</sup>

1927年大会は、新しい歴史上の発見や聖書批評学の発展による、神学的対立の政治的解決策として、《神学的真理の決定権は全国レベル（大会）ではなく、地方レベル（中会）にある》とし分裂を回避した。これは、教会政治力学による解決であり、以降のPCUSA(1983年再合同後のPC(USA))の神学的取り組みに甚大な影響を与えるものとなった。<sup>48</sup>

当時7つの主要プロテスタント教派は、ジョン・D・ロックフェラー Jr. の財政的支援を受け、Laymen's Foreign Missions Inquiry を結成し世界宣教活動を行っており、1932年に100年の活動報告書を発表し次の宣教活動目標を述べた。

我々がイエス・キリストによって知り得た命と言葉を提示し、世界の人々が人生において彼らの精神を実行するよう努力して、他の地域に住む人々と共に真の知識と神の愛を探し求める

この報告は、キリスト教が他の宗教に取って代わることを主張していない。保守派は、宣教師は全ての人をキリスト教信仰へ導くよう努力すべきであり、宣教師には「1910年の教義的判断」の5項目を遵守させるべきと主張したが受け入れられず、独自にIndependent Board for Presbyterian Missionsを設立した。しかし、1934年大会は『規則集』違反とした。

1936年メイチェンら保守派はPresbyterian Church of America(1939年Orthodox Presbyterian Church:OPCに改称)を設立し分離したが、従ったのはPCUSAの1%に満たなかった。これにより、1925年以来の対立は終了した。<sup>49</sup>

南北長老教会の分裂は1983年まで続くが、第二次世界大戦(1939-1945年)に先立つこの時代、北部(PCUSA)の関心は現代精神をいかに捉えるかにあり、ダーウィン主義や聖書高等批評を含んでいた。一方南部(PCUS)の関心は伝統の継承にあり、聖書の無誤性、ウェストミンスター基準の遵守、教会の霊的宣教の拡大にあった。新正統主義神学が広がりを見せたのもこの時期であった。

1939年に南北合同の検討が開始されると、南部保守派は北部の現代主義が入り込

<sup>47</sup> Fred W. Beuttler, *Making Theology Matter: Power, Polity and the Theological Debate over Homosexual Ordination in the Presbyterian Church(U.S.A.)*, Review of Religious Research, 1999, Vol. 41, p250,251.

<sup>48</sup> *ibid.*, p239, p247.

<sup>49</sup> James Moorhead, *Mainstream Presbyterians: Putting the Pieces Together Again after the Fundamentalist Controversy*, Journal of Presbyterian History Volume 86, Number 2 - Fall/Winter 2008, pp71-78.

[http://history.pcusa.org/news/releases/2011/times\\_of\\_controversy/jph862\\_text%20final\\_moorhead.pdf](http://history.pcusa.org/news/releases/2011/times_of_controversy/jph862_text%20final_moorhead.pdf) 2012.01.31.

む事を警戒した。保守派は1964年、かつてメイチェンが Independent Board for Presbyterian Foreign Mission を組織したように、社会的福音から離れ霊的教会の教理に基づく海外宣教を目指す、Presbyterian Evangelistic Fellowship (PEF)を設立した。<sup>50</sup>

1958年北部の長老教会 United Church of North America と PCUSA とは合同し United Presbyterian Church in the USA (UPCUSA)を結成する。この合同に際して、北米長老教会史上初の信仰告白である1967年信仰告白とそれを含む『信仰告白集(Book of Confessions)』が制定された。1967年信仰告白の詳細は「2. 2. PC(USA) 信仰告白史」において述べる。

ハートらは OPC の立場から、新正統主義神学が長老教会をダメにしたとする。<sup>51</sup>

この間、南部の長老教会 PCUS は1964年に女性の按手を認めたが、OSC 神学への固執と、社会的変化に抵抗する根本主義とが混ざり合った神学的立場をとった。

南北長老教会の合同は1930年代から模索されたが人種差別に対する見解の違いから進展しなかった。1954年連邦最高裁の公立学校における人種隔離違憲判決 (Brown Decision)や、1962年 Ole Miss crisis(ミシシッピ大学への黒人学生入学をめぐり、連邦政府軍と入学反対派が衝突)は PCUS 内の対立を激化させた。<sup>52</sup> 1973年南部保守派は、PCUS はもはや教会の本質と使命を失ったとし、南北合同の検討における教会財産分与問題も一因となり、112年前の PCUS 創始者の信仰を正統的に継承するとして、National Presbyterian Church(後に Presbyterian Church in America : PCA)を結成した。彼らの最大の脅威は新正統主義の浸透にあった。<sup>53, 54</sup>

1975年に PCUS は、多数の信仰告白 (Book of Confessions)を採用する北部の進歩的な基本線に徐々に追いついていったがこれは、特定の教義の肯定ではなく、「神

<sup>50</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 10: 1936: A Continuing Presbyterian Church*, [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=9](http://www.opc.org/nh.html?article_id=9) 2012.06.08.

<sup>51</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 11: The Confession of 1967*, [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=59](http://www.opc.org/nh.html?article_id=59) 2012.06.08.

<sup>52</sup> Jackson's Reformed Theminary の神学教授 Morton H. Smith は「人種隔離の撤廃は人種間の結婚に結びつき、1960年代の社会革命は神による多様性を破壊し共産主義を助長する。奴隷制は聖書において認められており罪としての批判は避けるべきだ。人種隔離も同様であり、神はカナンの民からイスラエルを隔離された」と述べた。

R. Milton Winter, *Division & Reunion in the Presbyterian Church*, U.S. VI. <http://www.history.pcusa.org/resources/jph/2000/spring/DivisionAndReunionPCUS.html> 2012.07.27.

<sup>53</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part 12: 1973: The Presbyterian Church in America*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=65](http://www.opc.org/nh.html?article_id=65) 2012.06.19.

<sup>54</sup> PCA は1861年版 WCF を採用し、牧師・長老・執事は男性のみ、離婚者の再婚を禁じた。予定説の厳密な解釈、聖書に書かれたとおり6日間での創造、結婚における女性の服従、産児制限と飲酒反対などを特徴とする。R. Milton Winter, op.cit.,VII.

の救済の証人」として信仰告白を再定義することで北部長老教会に続いた。

1980年PCUSは、小児洗礼を受け信仰告白式（洗礼の誓約の確認）が済んでいない者が主の食卓（聖餐式）に加わることを認めた。<sup>55, 56</sup>

1983年北部長老教会(UPCUSA)と南部長老教会(PCUS)は合併し、Presbyterian Church (U.S.A.)を組織した。

この合同は、先立つ次ぎの2つの出来事が反対する保守派の離脱を促し、Evangelical Presbyterian Church 結成に至らしめたことが寄与したとされる。

・ 1975年 Pittsburgh Presbytery の Wynn Kenyon は女性按手のための礼拝には参加できないとした。Commission of the UPCUSA General Assembly 司法委員会は、「中会は『規則集』に明記された条項を拒絶した者の按手を否定しなければならない」と裁決した。<sup>57</sup>

・ 1981年の National Capital Union Presbytery における牧師就任の資格審査において、Mansfield Kaseman (United Church of Christ の牧師)は、「イエス・キリストが神であると信じるか」と尋ねられ、「いいえ、神は神です」と答えたが大多数によって受け入れられた。保守派はこれを、キリストの神性の否認と解釈し訴えを常設司法委員会(Permanent Judicial Commission:PJC)に起こしたが、PJC は中会にこの事件をまわした。第2回審査で、Kaseman は、キリストの肉体の蘇りについて4回尋ねられ、「私は必然的に肉体の蘇りを信じることなく、キリストの復活を信じます」とし、三位一体の教義を「支持する」が、「私にとって、知る価値がある神は、正統性の追求よりもむしろ解放の探究によって見つかる」とした。

中会は再び Kaseman を承認し、保守主義者の再上告による最終審問は Philadelphia の PJC で行われたが、「受理可能な範囲内の見解であり、新しい誓約基準によって可能になった」とした中会の判断を正当とした。<sup>58</sup>

以前は、長老教会の牧師はウェストミンスター信仰告白と教理問答を「受け取りそして受け入れる」と誓約しなければならなかったが、1967年以降教会は信条の主要部分を広げ、新任牧師は9つの信条と告白により単に「教えられ」「継続的に導

<sup>55</sup> R. Milton Winter, op.cit.,VI.

<sup>56</sup> PC(USA)の現在の規定を記す。「洗礼を受け（信仰を）はぐくみ育てられ聖餐桌への招きとその応答についての教育を受け、かつ成人の理解とは異なるとしてもそれに加わることを意味を理解した者は主の聖餐に招かれる。」W-2.4011 b., Book of Order 2009/2011.

<sup>57</sup> D. G. Hart and John R. Muether, *Horizons Part13:Presbyterian Reunion in 1983*, [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=290](http://www.opc.org/nh.html?article_id=290) 2012.06.20.

<sup>58</sup> *Religion: Dispute over the Deity off Christ*, TIME Magazine U.S. , Feb. 18, 1981. <http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,954683,00.html#ixzz1yKePftAg> 2010.09.22.

かれる」と誓約すればよいとされていた。

## 2. 1. 4. 第4の時代(1983-2012年) 同性愛問題の歴史

プロテスタント教会は、墮胎・自殺幫助・進化と創造・同性愛・婚前交渉などに関する理解により、大きく保守的・主流・進歩的の3つに分けられる。長老教会においても、同じ聖書を読みながらその結論はまったく反対になる現象が、同性愛をめぐる問題（同性愛者の按手、同性婚など）で顕在化している。

1. PC(USA)はどのような教会か において同性愛者の問題がPC(USA)を苦しめている姿を見た。この問題を歴史的にたどりたい。<sup>59</sup>

1970年代において同性愛者は、住宅、雇用、公共施設利用などで差別されており、人権養護と牧会的配慮の問題であった。

1980年代には、エイズ問題は同性愛者に対する神の罰と論じられさえした。この間、教会は会員としては受け入れるが、按手や同性婚は拒否した。<sup>60</sup>

1991年大会報告：「魂と肉体の一致：性的嗜好、霊性、社会正義」と題した多数意見報告では、同性婚を扱い、「クリスチャーの道徳は、結婚に限定されずむしろ愛の正義にある。この道徳規範は結婚した人と同様、独身者にも、ゲイにも、レスビアンにも、両性愛者にも、異性愛者と同様に適応される。」とした。しかし、反対意見報告は「聖書は同性愛を道徳的でない」と語り、性的関係に関する神の計画は、男女間の結婚にあるとする。これに従えないゲイとレスビアンには深い哀れみと許しが与えられる。しかし、同性愛者の按手は認められない」とした。投票の結果501対7で反対意見が採択された。

1991年大会：「権威ある指導」を発行し、「各教会の長老会は、教会施設の利用や、御言葉と聖礼典に仕える牧師が結婚式に相当する式の司式すること」を禁じるべきだとした。

1994年大会：牧師が同性婚を祝福することを禁じる『規則集』改訂を議決した。しかし、この改訂は1995年に中会の投票により否決された。

1998年11月ニューヨーク：Dobbs Ferry 南部長老教会で同性婚の式が公然と行われ、近隣のベツレヘム長老教会は、Hudson River 中会に告訴した。

<sup>59</sup> *The History of the Polity of the Gay and Lesbian Ordination and/or Installation, and Same-Gender Blessings and Marriage Debates in the Presbyterian Church(U.S.A.) 1983-2009*, University of Pretoria.

<http://upetd.up.ac.za/thesis/available/etd-07042009-213526/unrestricted/05chapter5.pdf>  
2012.06.27. に大会における詳細な議論が全て収録されている。

<sup>60</sup> 森本あんり 前掲書 159頁。

1999年1月：中会は107対35で牧師による同性婚の司式を認めた。そして、「この種の式は『規則集』に言う結婚式に当たらない」とした。これを契機として、同性婚式を禁じる『規則集』改訂が再び論じられるようになった。改訂案は1994年大会で可決されたが、1995年に中会の投票で否決されていた。

2000年5月25日 PJC：長老教会の牧師は、「この種の式は『規則集』に言う結婚式に当たらない」との考えにとどまる限りにおいて、同性婚の司式を行えるとした。<sup>61</sup>

2000年6月：212回大会は、「聖書と信仰告白は、神は男と女の結婚の契約もしくは独身で純潔を守ることによる忠誠が求められると教える。神の意思に反して、教会の諸施設を用い、祝福を与えるあらゆる儀式に教会役員がかかわってはならない。」との一文を『規則集』へ追加する改定案を、268対251で承認した。

2001年3月：中会の投票により改定案は否決された。<sup>62</sup>

2006年大会：2001年213回大会で設置された、神学の特別対策本部(TTF)の「ゲイとレスビアンの按手に関する報告書」が完成し大会に報告され298対221で承認された。この提案を次に示す。<sup>63</sup>

- ・ 『規則集』の按手基準を変更せず“独身か異性と結婚したもの”のままとする
- ・ 基準を満たさない候補、すなわち同性愛者か両性愛者は、中会が例外として認める場合、その権限により按手することができる

2008年6月27日：「男性と女性の間の結婚の契約を守るか、もしくは独身の純潔を守ること」を牧師および他の教会役員に要求する『規則集』G-6.0106の改訂が提案された。改定案は「教会で按手を必要とされる奉仕に携わる人は、按手および任命のための質問への同意(W-4.4003)において、『聖書の証言と信仰告白の導きを通して聖書を理解する様努力し、教会の頭であるイエス・キリストに従順な生活を送る』と誓約し、教会の基準への忠誠を言い表す。按手と任命の試験に責任を負う各統治機関は、候補がこれら標準(G-14.0240と・14.0450)を厳守する努力を確認する。」とした。この改定案は380対325の僅差で可決され中会の投票に付されたが否決された。

---

<sup>61</sup> Homosexuality and Christian denominations, *The Presbyterian Church (USA) & same-sex unions, from 1991 to GA preparations in 2001*, [http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru5.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru5.htm) 2010.12.31.

<sup>62</sup> Homosexuality and Christian denominations, *The Presbyterian Church (USA) & same-sex unions, from the 2000 GA until 2003*, [http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru5a.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru5a.htm) 2010.12.31.

<sup>63</sup> The Presbyterian Church (USA) and gay/lesbian ordination, *Events during 2006*, [http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru17.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru17.htm) 2010.12.31.

## 2. 2. PC(USA) 信仰告白史

16世紀の宗教改革において、ルターは宗教的権威を"Sola Scriptura"とし、教皇の首位権を否定し"Hier stehe ich :私はここに立つ"として個人の聖書解釈を重んじた。これは例えばウェストミンスター信仰告白第20章2項における「神のみが良心の主であり、・・・信仰と礼拝の事柄においてであれば、み言葉の外にあるところの、人間の教えと戒めから良心を自由にされた。」に反映されている。

しかし、信仰的権威をどこに置くかは大きな問題であり、改革派の教会は信仰告白によって導かれ制限されつつ、聖書によって教会を建てるとした。改革教会はみ言葉によって改革され続ける(Ecclesia reforma, semper reformanda)のであり、長老教会において、改革され続ける信仰告白は、権威ある「聖書解釈」をもたらす信仰的権威をもたらす。ここでは、信仰告白が可変性を有する点が重要であり、これが失われたとき宗教的権威主義に陥る。<sup>64</sup>

現在PC(USA)が『信仰告白集』に11の文章を収めていることを見た。(p2) しかし、1967年にPC(USA)の前身、United Presbyterian Church in the United States of America (UPCUSA)が『信仰告白集』を採用するまで、300年以上にわたり長老教会では、ウェストミンスター信仰告白(1647年制定)がその信仰内容を表明する最も重要な告白であり続けた。<sup>65</sup>

長老教会では信仰告白は聖書の理解そのものと言える。その歴史的変遷は、どのような信仰を維持した時代の変化に対応してきたかを示している。

### 2. 2. 1. ウェストミンスター信仰告白 (以下WCFと記す)

#### 2. 2. 1. 1. 米国渡来前史

国王チャールズI世と対立するイングランド議会は、1643年ウェストミンスター会議に国教会刷新の勧告を要請した。会議は5年間に信仰告白、大・小教理問答(ウェストミンスター信仰基準)を作成した。これらは、1647年スコットランド国教会大会において受け入れられた。内容は、聖書の無誤性(1章)三位一体の神(2章)二重予定(3章)全的墮落(6章)イエス・キリストの代死と復活(8章)信仰義認(11章)聖化(14章)和解(16章)宗教礼拝と祈りの尊重(21章)などの教理に加え、国家為政者の教会会議招集(23章)結婚の定め(24章)に及ぶ。結婚の定めにおいて、非信仰者や偶像崇拝者との結婚を禁止しているなど時代背景を負って

<sup>64</sup> Beuttler, op.cit., pp241-242.

<sup>65</sup> McKim, op.cit., p2.



いる。岡田は、「英国における宗教改革運動の産物としての特異性と共に、キリスト教固有の信条観、すなわち聖書と教会との正常関係の保持調整という意図と努力が結晶している。」<sup>66</sup> とし、「今日のように、階級とか職場とか種々なマスコミ的複雑な人間関係はまだ発生しておらず、したがってキリスト教倫理は、社会学や刑事学的課題までは自覚されていなかった。焦点が一方では対教会問題、他方では対為政者問題の二方面に絞られているのもやむをえない。」とする。「第1章6項において、神礼拝と教会政治に関しては、時代によって変化するのが当然であることに言及している」と述べる。<sup>67</sup>

#### \* 1658年 サヴォイ宣言

チャールズ I 世処刑(1649年)の後、会衆派と独立派が支配するにいたり、WCF が監督制あるいは長老制的に教会を統一するのを拒否し<sup>68</sup>、変更を宣言した。主要点は、第23章「国家的為政者について」3項を、国会的為政者は福音の保護義務を負うものの良心の自由への関与は出来ないとし、4項を削除した。さらに第20章「福音とその恩恵の範囲について」を加え、教会に関する第26章を変更、第30,31章を削除し、会衆派の基本原則を30項からなる「諸教会の設立とイエス・キリストによってそれに対して命ぜられた職制」によって表した。<sup>69</sup> WCF は英国を出る以前に、「改訂」と言うエートスを持っていた。これはまた、時代の中で信仰告白に忠実に生きようとする長老教会のエートスに受け継がれていく。以下米国長老教会史のなかでその変遷を見ていく。

#### 2. 2. 1. 2. 米国渡来後の WCF とその関連事象

PC(USA)の前身である教会と、そこから離脱して行った教会における WCF とその関連事象を追う。

#### \* 1788年 アメリカ改訂版 WCF

1729年フィラデルフィアで開催された米国初の長老教会地方大会は、いくつかの留保事項を置きながらも、原 WCF を正式の教義と定め、中会は按手候補者が「本質的で必要不可欠な」項目を否定する場合、按手を拒否するよう求めた。<sup>70</sup>

<sup>66</sup> 『ウェストミンスター信仰基準 日本基督教改革派教会大会出版委員会編』新教出版社 1994、岡田稔 解説と付記 p113. なお、本論文における WCF の日本語訳には、主に本著を用いている。

<sup>67</sup> 前掲書 p117.

<sup>68</sup> ヤン・ロールズ『改革教会の信仰告白の神学』芳賀力訳 一麦出版社 2000年 p49.

<sup>69</sup> Michael D. Marlowe, *THE WESTMINSTER CONFSSION OF FAITH*, 1996 MAJOR CHANGES OF THE SAVOY DECLARATION <http://www.bible-researcher.com/wescoappa.html> 2012.05.10.

<sup>70</sup> Michael D. Marlowe, *THE WESTMINSTER CONFSSION OF FAITH*, 1996 <http://www.bible-researcher.com/wescon01.html#intro> 2011.12.06.

1787年制定されたアメリカ合衆国憲法は、宗教的自由の保障として国家と教会の厳格な分離を定めた。この様な状況下、長老教会はWCFを、新たな政治的状况に適合させる必要を感じ取った。<sup>71</sup>

1788年、フィラデルフィアとニューヨークの合同中会は次ぎの改訂を行なった。第20章 キリスト者の自由および良心の自由について 4項「国家的為政者の権能によって」を削除。第22章 合法的宣誓と請願について 3項「とはいえ、合法的権威によって課せられた、善で正しいことについての宣誓を拒むことは、罪である」を削除。23章 国家的為政者について 3項を全面改訂、国家的為政者の教会会議への参与の定めを、特定教派の優遇を禁止すると共に活動の自由を保証するものとした。24章 結婚と離婚について 4項「妻の近親者との結婚禁止規定」を削除。25章 教会について 6項ローマ教皇を「彼こそは教会においてキリストとすべて神と呼ばれるもの」とに反抗して自分を高くするところの、かの非キリスト、不法の者、滅びの子である。」とする部分を削除。31章 地方議会と総会議について 1項でそれらがキリストから与えられている使命を明確化し、2項「為政者の地方会議への関与」に関する項目を削除した。<sup>72</sup>

#### \* 1814年 カンバーランド長老教会信仰告白

18世紀の大覚醒運動の後、信仰復興運動の支持と開拓地での按手条件緩和の問題から、1810年にPCUSAからカンバーランド長老教会が離脱し、二重予定説（予定の限定主義）を拒否してカンバーランド長老教会信仰告白を制定した。

WCF「第3章 神の永遠の聖定について」1,2節を大幅に変更し、[永遠の昔からの予定論]を[信仰を条件とする予定論]に変えた。WCFは棄却を「変更不可能な聖定に由来する、特定の個人の永遠の棄却」とするが、カンバーランド版は、「罪の結果律法により棄却された全人類の棄却された状態は、彼らがキリストを受け入れるまで続く」とし、カルバン主義的な限定予定論による棄却と断罪の同一視は不当であるとした。[永遠の昔からの]無条件の選びが存在するのではなく、た

<sup>71</sup> ヤン・ロールズ 前掲書 p 478 ロールズは合衆国憲法制定をその根拠に上げるが、合衆国憲法は第6条「アメリカ合衆国では如何なる役職もまた公的な信託もその資格付けのために宗教的な審問を要求してはならない」と規定するだけである。これは1791年合衆国憲法修正第1条「合衆国議会は、国教を樹立、または宗教上の行為を自由に行なうことを禁止する法律（中略）を制定してはならない。」であろうが、アメリカ改訂版WCFの後になる。この時代米国長老教会において、国家と教会の分離意識が高まっていたと解釈したい。

<sup>72</sup> Orthodox Presbyterian Church, *American Revisions to the Westminster Confession of Faith*, [http://www.opc.org/documents/WCF\\_orig.html](http://www.opc.org/documents/WCF_orig.html) 2011.12.29.

ロールズ前掲書『ウェストミンスター信仰基準』は改訂を1787年と記している。

だ信じると言う条件下でなされる選が存在するとした。<sup>73</sup>

\* 1837年 オーバン宣言

1837年5月フィラデルフィアで開催された北米長老教会大会はOSC<sup>74</sup>に支配され、NSCを「その形態においても実体においても長老教会の一部ではない」として切除した。(p14) NSCは同年8月オーバンで異端とされた16ヶ条に対する弁明としてこの宣言を表明した。NSC側は、「自分たちの信仰告白はWCFであり、これを正当にかつ円熟した意味で理解している。従ってこの宣言はWCFの正統な解釈である」と位置づけ新たな信仰告白ではなく宣言とした。<sup>75</sup>

1868年大会ではこの宣言をもって、「カルヴァンの信条の一切の基本的なもの」と決議された。主要な内容を以下に記す。<sup>76</sup>

1章 罪の許容 : 神は罪が導き入れられることを許容した。

2章 選び : 永遠の生命への選びは神の主権行為である。神はある者たちを救いに選び給うた。この恵み深い目的は、信仰や聖なる生活と無関係に遂行されるものではない。

3章 アダムの墮落 : 彼が罪を犯した結果として、全人類は道徳的に腐敗し、死ぬべきものになった。

4章 遺伝的罪 : 幼児は悪に、悪のみに傾いた性質を持って来る。

6章 万人に必要な贖い : すべての幼児も救われるためには、キリストの血による贖いと聖霊による新生とを必要とする。

8章 キリストの贖罪 : キリストの苦難は罪を犯した者に相応する刑罰の代償であった。信ずるものすべてに救いが保証された。

12章 新生 : 新生は、聖霊の特別な働きによって生み出された心の根本的変化であって、いかなる場合においても瞬間的である。

13章 恵みによる救い : 罪の悔改めとキリストを信じる信仰とは救いに欠くことができない。神は万人を救ってはいない。

14章 意思の自由 : 精神に及ぼす神の働きによって、意思の自由はそこなわれもしない。神は御心のままにそれに影響を与えることができる。

<sup>73</sup> ヤン・ロールス 前掲書 p479 制定年度をロールスは1829年(総会開催年)と記すがカンバーランド長老教会ホームページでは1814年としている。

<http://www.cumberland.org/gao/confession/confess.htm#1883%20Introduction> 2014.04.26.

<sup>74</sup> OSCはWCFが聖書に含まれる人間的に実現可能な教理に最も近いとした。

Marsden, op.cit., p110.

<sup>75</sup> 『信條集 後篇』新教出版社 1957年 p337. 加藤邦雄による解説。

<sup>76</sup> 前掲書 pp277-279.

15章 義認 : すべて信ずる者は、その人の功績に基づくのではなく、キリストの死と服従による義に基づいてのみ義とされる。

16章 信仰と不信仰との自由 : すべてキリストの福音を斥ける者は強制されてではなく自発的にそれを斥け、すべてそれを受け入れる者は強制されてではなく自発的にそれを受け入れるが、人によって相違する理由は神が彼らをそのように相違せしめ給うたからである。

\* 1903年 PCUSA 改訂版 WCF

1800年代後半、産業の振興と技術の進歩によりアメリカは希望に満ちていた。<sup>77</sup> ユニオン神学校のブリッグスは、聖書の高等批判を推奨するとともに(p16)、過去の神学が時代精神の包含を妨げているとし、プリンストン神学大学の A.A.ホッジ や B.B. ウォフィールドなど、正統主義 OSC の閉鎖性や高慢を非難した。一方、ウォフィールドは、進化論の広まりとともに、科学者のみならず神学者でさえ、奇跡を否定する風潮が激しくなることに、危機感を覚えていた。<sup>78</sup> この様な中ブリッグスはユニオン神学校を追われることになるが、WCF 見直しの機運は高まっていった。

PCUSA はカルヴァン主義への深い関与を、より時代に即したものとするため、「34章 聖霊」と「35章 神の愛の福音と伝道」と「宣言文」を加え<sup>79</sup>、16章7項を「再生しない人々がする行為は神が命じておられる事柄であっても、罪深いものであり全く価値のないもの」から、「神のご命令へのかれらの行為は称賛に値し有益で有り得る」と書きなおした。<sup>80</sup> さらに「宣言文」では、教会により信仰告白文から導かれた推論の中に否認すべきものの存在を認めつつ、『規則集』の求めにより、按手時に信仰告白を聖書の教える教理を含むものとして、受理し従う誓約が求められ、現代においてより明示的に述べることが要求される、次ぎの2点を宣言する。

・ 「第3章 神の永遠の聖定について」 キリストにおける救いに関するこの教理は、神の永遠の裁きの教理と、全世界の罪との和解のための贈り物として御子をくださり、神が全人類を愛しておられるとの教理と調和し保持される。神の永遠の裁きにより滅びるべき者だと言う教理は、神は全ての罪人の死を望まれるのではなく、かえってキリストにおいて求めるすべての人へ値なしの十分な福音と十分な救いをもたらされるとの教理と調和し保持される。これらはすべての人に値なしで

<sup>77</sup> D. G. Hart and John Muether, op. cit., *Part 8: Confessional Revision in 1903*.

<sup>78</sup> Marsden, op. cit., p109.

<sup>79</sup> op.cit., *The Book of Confessions*, p160-164.

<sup>80</sup> *ibid.*, p139.

与えられ、人はこの神の深い恵みに対して責任がある。神の判決はその恵みの受容から何人をも妨げず、何人もおのれの罪の故以外には罪に定められない

・ 「第10章 有効召命 3項」は、幼くして死んだものは失われた者だとする教理とは見倣せず、彼らは恵みの選びの内にあり聖霊を通してキリストにより再生に与り救われる

ヘンリー・ヴァン・ダイク<sup>81</sup> はこれらが、「神が恵みを与えられる際の主権の問題と、全ての人に注がれる無限の愛」に関する神学的問題であり、「反カルバン主義者は前者を排撃し、熱狂的カルバン主義者や、墮罪前予定論者は選びを重視し後者を排撃する。真のカルヴァン主義者は両者を信じる。両者は一貫性のあるものだ。」と述べる。多くの長老教会は、この改訂を「包括的なカルヴァン主義」を保持するものとして歓迎したが、神学的に大きな転換点となった。

この改訂により 1906 年に、二重予定説を否定し離脱していたカンバーランド長老教会から、半数以上の教会が PCUSA に復帰した。<sup>82</sup>

\* 1910年の教義的判断 (The Doctrinal Deliverance of 1910)

(後に根本主義の5カ条"Five Fundamentals"と呼ばれる)

1910年 PCUSA 大会は、キリスト教信仰において必要かつ本質的であるとする5項目の教義上の判断を宣言した。

1. 聖書は聖霊の靈感による。その結果、聖書には誤りがない
2. キリストの前存在、神性、処女降誕
3. キリストの死は、神の公正を満たすための罪の贖いであった
4. キリストの体を持つての復活、昇天ととりなし
5. キリストの奇跡の歴史的現実性

この表明は1890年代に始まっていた PCUSA における、キリスト教根本主義と現代主義者の争いの公式な始まりであった。1928年に PCUSA 大会はこれを否定する。少数派は、正統長老教会 (Orthodox Presbyterian Church:OPC) を組織した。<sup>83</sup>

\* 1924年 オーバンにおける確認 (Auburn Affirmation) <sup>84</sup>

保守派の 1910 年 The Doctrinal Deliverance of 1910 に対しリベラル派はその

<sup>81</sup> プリンストン神学校を卒業、英文学教授、作家でありオランダ公使を務めた。

<http://www.poemhunter.com/henry-van-dyke/biography/> 2012.05.02.

<sup>82</sup> D. G. Hart and John Muether, op. cit., *Part 8: Confessional Revision in 1903*

<sup>83</sup> New World Encyclopedia, *Westminster Confession*,

[http://www.newworldencyclopedia.org/entry/Westminster\\_Confession](http://www.newworldencyclopedia.org/entry/Westminster_Confession) 2012.04.12.

<sup>84</sup> The Auburn Affirmation, *PCA Historical Center, Archives & Manuscript Repository for the Continuing Presbyterian Church*, <http://www.pcahistory.org/documents/auburntext.html> 2012.05.30.

主張を明らかにした。要旨を以下に示す。

- 信仰告白それ自体が絶対に正しい物ではない。使徒時代以降、教会会議は多くの誤りをおかした。従ってそれらは信仰の規範としてではなく信仰を力づけるものとして用いられるべきだ
- 聖書解釈の最高権威は、ローマカトリック教会の様に、教会にあるのではなく、信仰者に働く聖霊にある
- 聖書の著者が誤りから無縁であった保証はない。聖書無誤の教理は、使徒信条・ニカイヤ信条・その他の代表的な改革派の信条には見られない
- 大会には中会と共に行う以外、教義を指図する権限はない
- 大会の、ニューヨーク市第一長老教会の説教が「長老教会の標準的教義に反した」との非難は、『規則集』に述べられた適切な手続きに則っていない
- 5つの本質的な教義のいずれも按手の可否や教会の健全性判断の条件として使用されるべきではない。これらと異なる教理も許容可能だ
- 次の教理を大切に
  - ・ 聖書記者は神の靈感を受けた
  - ・ イエス・キリストは肉において明確に神であった
  - ・ 神はキリストにおいて世をご自分と和解させ、われわれはキリストを通して罪の贖いを受けている
  - ・ キリストは我々の罪の為に死に、よみがえり、永遠に変わらない我々の救い主となられた
  - ・ キリストは地上における宣教において多くの力強い業をなさり、その代死と永遠の存在によって、極限までの救いをもたらしてくださる
- 福音的キリスト教の範囲を越える自由は望まないが、1923年大会が認めた1910年の教理的判断が上記教理の唯一の理解ではない。考えと教えの自由は重要だ。キリストの弟子である我々の分裂は遺憾であり、教会の一致と自由が望まれる。

\* 1958年 UPCUSA 改訂版 WCF

PCUSA と United Presbyterian of North America が合同して結成された北の United Presbyterian Church in the U.S.A.(UPCUSA) は、第 24 章 結婚と離婚を「姦淫の場合のみ離婚再婚が可能」から「人の罪のゆえに神が結ばれた結婚が壊れており、その懺悔を述べるなら離婚に到るかも知れない。また離婚後の再婚は、聖書において明示的に、キリストの福音において暗示的に示されているように、充

分な悔い改めと、キリスト教の結婚後の目的への確かな努力が明確な場合には認められる」と改訂した。<sup>85</sup> 聖書は明らかに離婚を非難している(マタイ 5:32、19:5-9)が、この改訂は当時の結婚観を反映するとともに、神学的には新正統主義の聖書観が反映したものといえる。

## 2. 2. 2. 1967年信仰告白

UPCUSA は米国長老教会 300 年の歴史上、初めて独自の信仰告白を制定した。この信仰告白の特徴を自ら次の様に述べる。<sup>86</sup>

- ・ 1960年代は混乱した時代であり、カトリック教会は第2バチカン公会議で思想と行動を刷新し、長老教会はこの信仰告白を行った
- ・ 1967年信仰告白の中心は聖句(2コリント 5:19)「神はキリストによって世を御自分と和解させ、・・・」にある
- ・ 第一部「神の和解の働き」は3つの部分からなる。主イエス・キリストの恵み/神の愛/聖霊の交わり 第二部「和解の務め」は、教会の務め/教会の構成 第三部「和解の完成」は、神の永遠の勝利における教会の希望 で構成される
- ・ 1967年信仰告白は、「現代における教会の務め」に向けられており、教会に次のことを求める。\* 聖書を文学的かつ歴史的に読む \* 人種差別、国の傲慢、家族や階層間の対立などの社会的な問題に教会が関わるよう促がす
- ・ 生、死、復活、約束されたイエス・キリストの再臨、これらを今日における教会の使命の雛形とし全てのキリスト者が「神とお互いに対して和解する」よう促がす

UPCUSA の前身 PCUSA と 1936 年に袂をわかった保守的教派 OPC は、1967 年信仰告白はウェストミンスター信仰基準を無視した時代との迎合の産物であり、信仰告白の規範性を喪失せしめたものとし、次ぎの点を指摘する。<sup>87</sup>

- ・ 1958 年、United Presbyterian Church of North America は北部の主要長老教 PCUSA と合同し、UPCUSA を結成したが、合同に際し当時の長老教会員のために新しい告白の基準を書く合意があった
- ・ 教派の歴史において、信条の陳腐化に対して教会を保護するため、その時代の宣言を書く考え方が有った
- ・ ウェストミンスター基準への批判派は、「律法主義的すぎ(特に大教理問答の道德

<sup>85</sup> op. cit., *Book of Confessions*, pp148-152.

<sup>86</sup> ibid., p252.

<sup>87</sup> D. G. Hart and John Muether, op. cit., *Part 11: The Confession of 1967*  
[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=59](http://www.opc.org/nh.html?article_id=59) 2011.01.01.

的側面)、その教えに社会的側面はほとんど無い。最大の難点は、『神に見捨てられた者と選ばれた者を完全に分離する』教皇教令の神学で、17世紀の専制主義や派閥主義を反映している」とする

- ・ 1967年告白は、新正統主義神学の方法で、神の創造に関する超絶と、人間の墮罪と、神のイエス・キリストにおける恵みへの応答としての信仰への導きを確認し、聖書を「神の言」と表現し、忠実で「規範的な」(誤りを犯すが)証言者として、聖書をイエスに従属させた

- ・ 1967年告白は「聖書を文字通りでなく歴史的に読む」現代聖書学を支持し、聖書を無誤説から解放した

- ・ 1967年告白の中心は和解にあるが、キリストの恵みによる罪人と怒れる神との和解の聖書的教義ではなかった。この告白は、社会的福音の観点から教会の召命について記述した：教会は、「神の和解のメッセージを託され、人類の対立を治す神の働きを共有する。」

- ・ 1967年告白は現代に教会が証言する際、聖書的に絶対確実なキリストの処女降誕と復活、及びアメリカの長老教会が半世紀前に討議した他の要点を全て省略した

- ・ 1967年告白はカール・バルト神学が「新現代主義」としてPC(USA)に浸透した証拠であり、新正統主義は自由主義より長老教会においてより成功し易いことが確かめられた。自由主義は、教会のウェストミンスター基準に対する確信を弱めたが、新しい告白を巧妙に作るという点には寄与した

- ・ 1967年のバルト的告白は、ウェストミンスター基準の拒否に影響したが、実際にはすべての歴史的な信条は支持された。バルトの説く聖書と三位一体論の方がはるかに正統的であり、バルトが決して行わなかった、自由主義とローマカトリックの精神に順応する

\* 『信仰告白集(Book of Confessions)』

1967年北のUPCUSA大会は、「1967年信仰告白」と共に、7つの信仰告白を集めた『信仰告白集』を承認した。<sup>88</sup> この信仰告白集に対する評価は分かれる。

ハートらは、次の様に酷評する。

『信仰告白集』は不一致の書である。すなわち、相互に排他的な福音の集積だ。信条間の明らかな矛盾は教会の按手誓約を書き直すことにより解決された。長老教会の役員は、教会に対して「聖書の権威と告白の導きの下に」、教会に対する義務

---

<sup>88</sup> ニカイヤ信条、使徒信条、スコットランド信仰告白、ハイデルベルク信仰問答、第二スイス信条、ウェストミンスター信仰告白、小教理問答。大教理問答は1983年合同の際採用された。



を行なう様にのみ要求され、もはや、「聖書で見つかった教義を含むもの」として信仰告白の基準を受け取るものではなくなった。この変更により、UPCUSAは信仰告白の独自性を放棄した。なぜなら、信仰告白はもはや教会の役員が正統改革教会の許容される範囲の中なのか越えているのかを判断することに役立たない物となった。信仰告白の新しい役割は、「教え、導き、案内すること」にすぎない。1967年の信仰告白は、ウェストminster基準を、その歴史的意味においてのみ価値あるものとして、信条の博物館に引渡した。

これに対しリベラル派の神学者、オタッティは積極的意義を述べる。<sup>89</sup>

- ・ 信仰告白は時代と場所を負っている。それらは同じ“み言葉”を指示しているが、ことなる問題ことなる危機においてなされた。改革派にとって全ての信仰告白文は、一時的で暫定的なものであり、相対的権威を持つにすぎない

- ・ どの単一の信仰告白も誤りなく絶対的なものではない。一つだけを重要視することは、すなわち、“聖書のみ”を信仰と行動の規範とすることを危うくする

- ・ 相互の完全な整合性と均質性を欠くのは事実であり、『信仰告白集』を全体で受け止めることが重要だ。教会の信仰告白はより高い権威を持つ聖書に従属する

- ・ 16世紀の改革教会は、異なる地域や環境下で異なる発展を遂げた。今日100以上の国に200以上の改革派教団が存在する。ある特定の単一の信仰告白だけに依存しないことは、エキュメニカル的意義がある

\* 1973年 Presbyterian Church in America (PCA) 版 WCF

OSCの教理に立つ南部PCUSの教会は、南部と北部の教会が合同する機運が強まる中、独立してPCAを結成し、1788年アメリカ改訂版WCFに小さな修正を加えて採用した。修正点は、「妻の親戚との結婚」(第24章4項)と、「教皇を反キリストと呼ぶ」(第25章6項)のみであった。

## 2. 2. 3. PC(USA)の短い信仰の表明

### A Brief Statement of Faith - Presbyterian Church(U.S.A.)

1983年のPC(USA)結成に際し、教会と世間の双方に多様性と相違が存在する現実を認識しつつ長老教会共通の独自性を明言することを目指し、三位一体の信仰(L5)の枠組みにおいて、聖書と『信仰告白集』に記された信仰告白に基づいて、礼拝に使用できる「信仰の要約」を起草した。

<sup>89</sup> Douglas F. Ottati, *Theology for Liberal Presbyterians and Other Endangered Species*, Geneva Press, 2006.

使徒信条、ニカイヤ信条がイエスの誕生から死に飛ぶのに対して、ユダヤとガラヤでの宣教に注目し(L7-26)、性的包括性に努力し、神の契約における男女の役割を重視することなく(L27-32)、按手を男女共に認める(L64)。神に対し男性的なイメージと同様女性的イメージをも持っている(L49-50)。さらに神の創造されたものの完全性に対して懐疑的であり、“主イエスよ来たりませ”と祈りつつ神の新しい天と地を待ち望む(L75-76)。“我々は、生きるも死ぬも神に属し”(L1)で始まり、“生きるも死ぬも何者も私たちを私たちの主イエス・キリストの愛から引き離すことはできない”(L78-79)とし、頌栄(L80)で結ぶ。<sup>90</sup>

草案起草者の一人 J・L・ストッツは「バルメン宣言以後、改革教会の生み出した26の信仰告白文書に共通する主題には、五つの特徴が見られ、第一は、分かたれた世界における、一つなる教会を希求する態度、第二に、信仰にとってのイエス・キリストの中心性、特に今日の非人間的な世界における、人間性の贖いと成就としての和解者キリストの強調、第三に、聖書の歴史批評的研究法を取り入れつつ、その次元に解体されない、より高度な権威を持つ神の言葉としての聖書の復権、第四に、イエス・キリストにおける神の愛の具体性という点から、人種差別や貧困をなくし、正義と平和を追求し、性の責任ある自由(responsible freedom)を確立する社会を求め社会倫理への関心、第五に、福音を携えて世界へと派遣される伝道の強調である。」と述べる。<sup>91</sup> 同性愛の議論はこの信仰告白の下でなされている。

## 2. 3. PC(USA)の周辺史

PC(USA)とその前身は、米国におけるキリスト教世界の中に置かれてきた。PC(USA)の歴史がどのような文脈にあったのか、19世紀から20世紀にかけての代表的な事例、ダーウィン主義によって見たい。

さらに現在の対立の原因が発生した、1960年以降の教会周辺の状況を見る。

### 2. 3. 1. ダーウィン主義の影響

チャールズ・ロバート・ダーウィン(1809-1882年)は1859年の著書『種の紀源』において、生物の進化に関する自然選択説を提唱した。この理論は自然科学の領域

<sup>90</sup> Book of Confessions, op. Cit., p264. 'A Brief Statement of Faith' の解説文 に相当する行番号を付加した。

<sup>91</sup> ヤン・ロールス 前掲書 p541 訳者あとがきに芳賀が引用。Reformed Confessions. Theology from Zurich to Barmen, tr. by John Hoffmeyer, Westminster John Knox Press, Louisville, Kentucky, 1998.

を越え、聖書の創造物語の否定、さらには 19 世紀後半の優勝劣敗の楽観主義、アングロサクソンの進化論的優越性の認識に立った「アメリカに課せられた世界的使命」としての海外伝道など、キリスト教世界に多大な影響を与えた。<sup>92</sup>

スコットランド・コモンセンスに立った、プリンストン大学学長ジェームス・マコッシュ(James McCosh)は 1873 年「聖書と科学は並存し、共に確かな啓示だ。両者は世界の秩序を明らかにした。一方は神によって備えられ、他方は人間によって発見された。従って進化論は信仰に脅威を与えるものではない。適切な光の下での発展をみる者にとっては、そこに法則の型とその現れを見出すに過ぎない。」と述べ、進化論は神の創造を否定しないとした。<sup>93</sup>

しかし、危機感をいだいた C. ホッジは 1874 年『進化論とはなにか?』を著し、「種の起源は知性が目的をもって行った独創的なものでなく、またある特別な時期に創造という特別な行為によって新しく形が生まれたのでもない。また一定期間、物理的な原因と結果を操作しようとする神の働きがあったというわけでもない。」「進化論とは、無神論であり、自然から目的を排除してしまう無神論そのものである。」として反対した。<sup>94</sup>

このような状況下、1925 年の「スコープス裁判 (モンキー裁判)」は、テネシー州において公立学校で進化論を教えることを禁じる「反進化論法」の違憲性をめぐって争われ、マスコミが大々的に扱ったことから全米の注目を集めた。根本主義の非現実性が白日の下にさらされ世論は進化論者に味方した。<sup>95</sup>

1920 年代は自然科学・社会科学の発展の中で、キリスト教がいかに対応するか、具体的には聖書解釈の方法と進化論をめぐって、教派を越え根本主義者と現代主義者の争いが展開された。<sup>96</sup>

1887 年から 1921 年に渡ってプリンストン神学校教授を務めたベンジャミン B. ウォーフィールド(1851-1921 年)は、自然科学者たちが研究の果てに信仰を捨てる事態に危機を覚え一文を著した。<sup>97</sup> ダーウィン自身に自説を述べさせ「種の由来が

<sup>92</sup> 森本あんり 前掲書 pp124-129.

<sup>93</sup> Marsden, op.cit., pp18-19.

<sup>94</sup> 青木保憲『アメリカ福音主義の歴史 聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』明石書店 2012 年 pp73-75.

<sup>95</sup> 堀内一史『アメリカと宗教』中公新書 2010 年 pp50-57.

<sup>96</sup> 森孝一「メインライン教会と新宗教右翼」『基督教研究』京都同志社大学神学科内基督教研究会 第 48 卷 第 2 号 1987 年 p84.

<sup>97</sup> Benjamin B. Warfield, *Darwin's Arguments against Christianity and against Religion*, *Homiletic Review* (January 1889): 9-16. [reprinted in *Selected Shorter Writings of Benjamin B. Warfield*, vol II. Nutley, NJ: Presbyterian and Reformed, 1973.]

進化によるのみならず、その変化は長い時間を要した。しかし、創世記は神がそれぞれの種を別々に即座に創造したとする。進化論によればそれは間違いだ。旧新両約聖書は一体なので、旧約聖書の記述が信用できなければ、聖書を基礎とするキリスト教自体、真実ではありえない。創世記を放棄することは聖書を放棄することなのだ。キリストの時代の人は奇跡を信じるのに無垢であったが自然法則を知るほどに信じ難くなる。福音書は出来事とともに書かれたのではなく、お互いに重要な点でその証言は異なっている。私は次第に神の啓示としてのキリスト教を信じなくなった。」とし、「ダーウィンは有神論の証拠を注意深く検討した結果、『人格神を否定する』不可知論にいたる。」とする。そして、ウォーフィールドは「なぜ彼が本質からはずれた、自然淘汰による進化論によって理由づけられる野獣の心を信頼するようになったのか。しかし、有神論者やクリスチャンにとどまった多くの進化論者がいたにもかかわらず、彼が不可知論者になるのは必然だった。彼は、色々に変化した有機体が生存競争による環境への適応によって残るのであって、神の手を探し求めることは出来ないとし、この自然の過程が精神や道徳にも当てはまるので人の心の確信は信じられないとした。人格神への信頼の喪失とキリスト教の拒絶は、結局、彼の有機体の個体差に関する特殊な理論への執着であった。もし、神と聖書への確信以上に進化仮説がより自然だと支持する証拠があるなら、彼は論理的だと言える。結局、ダーウィンは抑えきれない確信を受容し至った失敗は、一途な研究と推論が彼の心を他の方面へと萎縮させ、証拠判断能力を奪ったとしてのみ説明できる。」と結論する。

進化論に関してもう一人の神学者の見解を聞こう。カール・バルトは、人間の本质を問う中で述べる。<sup>98</sup>

「近代の神学は先ず人間からして人間を見つつ、人間がなんであるかということ、先ず人間の現象から読み出そうとしたし、読み出すことが出来ると考えた。人間は現存する特定の猿類の子孫ではない。精神的な存在としての人間は、先行するどの有機体とも絶対に違う存在段階を代表している。特に人間の言語能力は傑出しており、ミクロコスモスをなしている。その人間性に与えられた文明の課題と倫理的課題は成就実現に向かって近づきつつあり、『人類の中で妨害的に働く悪の力に対立する善の決定的な勝利を信じる信仰』を捨てる理由は無い。19世紀は人間が自分の諸可能性を急速に進歩させる途上にありながら、自分自身が、人間を動物から

<http://www.bibleteacher.org/BBW3.htm> 2012.05.25.

<sup>98</sup> カール・バルト 『教会教義学 創造論Ⅱ/1 造られたもの 上』菅円吉、吉永正義訳 新教出版社 1973年 pp161-187.

区別するところのものが全くわからなくなってしまう時代であり、暗く陰鬱な世紀であった。実在の人間が見えなくなっていたが故にダーウィンの出現は必然であったし、自然科学的なまた神学的な反ダーウィン主義者達はダーウィンに対してあれほどに無力だった。神学者たちでさえ、この時代の精神に身を屈して行かねばならなかった。まず、ダーウィンの教義に原理的同意を示し、その同意の枠内で反論をするだけだった。人間についての認識が先攻しない場合、人間の本当の姿は、動物や宇宙と共通に持っているものから成り立っていると思ってしまう。」

### 2. 3. 2. 1960年代以降の教会をとりまくおもな出来事<sup>99</sup>

1960 - 70年代 ベトナム反戦運動、公民権運動、学生運動、女性解放運動、性革命、高等教育の普及による社会的寛容の増大（無神論・女性大統領許容・人種的許容度増大）、ライフスタイルの自由度増大（婚前交渉や離婚の許容）、全体的な宗教の影響力低下などが見られたが、保守的な南部バプテスト教会とミズーリ・ルーテル教会は急進し、エキュメニカルを掲げるメインライン教会は衰退した。第4次大覚醒運動とも呼ばれる。<sup>100</sup>

1973年 新福音派（宗教的に保守、政治的にリベラル）は進歩主義的な宗教による社会変革を目指し、物質主義の根絶・経済格差是正・戦争の要因となる国家の経済力や軍事力への過信是正・世界の貧困の改善、を掲げた。(Chicago Declaration of Evangelical Social Concern (1973))<sup>101</sup>

1978年 保守的な改革派、長老派、ルーテル、バプテストの代表は、聖書の無誤性に関するシカゴ声明(The Chicago Statement on Biblical Inerrancy)を表明した。

1980年代以降 妊娠中絶（プロライフ・プロチョイス）、同性婚問題（キリスト教右派がキリスト教倫理問題化）、文化戦争（公立学校での祈り禁止、ポルノ自由化、男女平等）が起きた。この間、福音派（政治的に活発に活動。家族の価値強調）が延び主流派は先細りとなった。（1960→2000年、南部バプテスト連盟 1000→1700

<sup>99</sup> 河野博子 『アメリカの原理主義』 集英社新書 2006年 pp52-139.

<sup>100</sup> Dan Chun, *Independence Day Sermon*, 2012

<http://www.fpchawaii.org/notes/fpcsermon070112.pdf> 2012.07.10 1960年代政教分離に関して次の様な違法・違憲判断が出された。1962年公立学校での祈り(Abington v Schempp, 374 U.S. 203 220-221)、1963年公立学校での聖書朗読(Murray v Curlett, 374 U.S. 203)、1965年生徒の食前の感謝、1967年幼稚園における神を想像させる感謝の童謡；花のかぐわしさ・食物・鳥の歌声・そして全てのものに感謝を唱えること(Dekalb v DeSpain)。

<sup>101</sup> 堀内一史 前掲書 p129 原文は下記にある。

<http://thejustlife.org/home/2008/05/01/chicago-declaration-of-evangelical-social-concern/> 2012.07.30.

万人、ペンテコステ派 200→1200 万人)

2001 年 ブッシュ政権 ES 細胞研究への政府助成を禁止

2003 年 マサチューセッツ州最高裁で同性婚合憲判決 04 年合法化 全米で同性婚論議活発化

2005 年 結婚に関しての法令は州において決めるべきとし、合衆国憲法改正案否決。尊厳死問題 最高裁が植物状態の患者から生命維持装置を外す行為への連邦政府の介入を否定した<sup>102, 103</sup>

保守派とリベラル派（ここでは新正統主義）は反ダーウィン主義で一致する。ウォーフフィールドにとって、発展著しい自然科学と聖書学によって、信仰を捨てたり、聖書無誤説を否定する者の増加は、論理的反論を加える以前のことであった。ダーウィンを「一途な研究と推論が彼の心を他の方面へと萎縮させ、証拠判断能力を奪ったとしてのみ説明できる。」と情緒的に断じるところにそれが現れている。

一方バルトは、マコッシュの立場(p34) に近く、「十字架と復活の出来事によって神が人間への愛を示されたことから、まことの人（イエス）を知ることにより人間を知ることができる」との文脈の中で、ダーウィン主義がナチスによってアリア人種優越の根拠として用いられたことなどに、戦争の世紀とされる 20 世紀の下地を見とめ、そこにおける神学者たちの無力を指摘する。

3 者の違いは「聖書の読み方」にある。ダーウィン主義の主張は“聖書無誤”を裏返したもの（創世記が科学的見地から誤りなのですべて信じられない）であり、新正統主義はそれと次元を異にしている。

反ダーウィンで一致する保守派とリベラル派ではあるが、両者の争いは「文化戦争 culture war」と呼ばれ、単なる政治的立場を越えアメリカ人をどのように規定し社会生活の中で何を重視するか、絶対的倫理や道徳の存在を認めるか否かに及ぶ。この対立は建国時にまで遡り得るものであり、近年激化しているとされる。<sup>104</sup>

政治への関与に関しては保守派・宗教右派が積極的であるのに対し、リベラル派・宗教左派は政教分離に厳格であり、主流派教会に属するリベラル派は、ボランティア活動をとおして、地域社会に貢献し貧困者を支援する事を好む傾向がある。<sup>105</sup>

<sup>102</sup> 堀内一史 前掲書 pp146-226.

<sup>103</sup> テリー・シャイボ事件 <http://www.cubeny.com/catch03-4-05.htm> 2012.07.30. に詳しい解説がある。

<sup>104</sup> 河野博子 前掲書 pp128-129.

<sup>105</sup> 堀内一史 前掲書 p261.

## 2. 4. PC(USA) に影響を与えた神学思想

PC(USA)とその前身には、関連の深い神学校の教授職にあったものを含めて、多くの神学者、神学思想家が影響を与えている。それら思想家の著作を見ていきたい。

### 2. 4. 1. メイチェン (John Gresham Machen:1881-1937 年)

彼が『キリスト教とは何ぞや』<sup>106</sup> を著した 1923 年は、第一次世界大戦 (1914-18 年)に続く時代であり、1939 年に始まる大恐慌との間の比較的安定した時代であった。19 世紀前半シュライエルマッハを祖とする、自由主義神学は、20 世紀初頭のハルナックの活躍もあり、勢力を広げていた。

第一章 緒論 において、「1 世紀の宗教が 20 世紀の科学と共存し得るか、キリスト教は科学的時代にもなお存続し得るか。」と問い、さらに「現代において、贖罪的宗教が全く類を異にする宗教信仰 (現代主義・自由主義) と戦っている。現代自由主義は、キリスト教の伝統的用語の自由な使用にも拘らずぜんぜん別種の宗教だ。」とし、自由主義に対する敵意をあらわにする。

第二章 教義 において根本主義の立場を「教義こそはパウロの生活の土台そのものであった。初代弟子等は言った、『キリストは聖書に依じて我等の罪のために死に給へり。彼は葬られ、聖書に依じて三日目に甦へり給へり』」とする。現代自由主義者は、「信仰を、福音・イエスの業績・イエスの死よりも、イエスの人格・イエス自身・イエスの品性におくべきだとする。」と述べ、「キリスト教の全基礎を拒斥しつつある。」と断罪する。一方、熱狂的な信仰に対しても批判の目を向け「プリミレニアリズム (前千年王国説) の現代教会に於ける再燃は我等をして真面目なる関心を有たしむる。それは蓋し聖書解釈の謬れる方法と考えられる。」とする。

第四章 聖書 において、「聖書は神よりの真の啓示を含んでいる。然しそれでも尚その記事は誤謬に満ちているかも知れない。それ故聖書の十全なる權威が樹立される前に、啓示の教義に靈感の教義がくわえられることを必要とする。事実、十全靈感の教義は聖書記者達の個性を拒否して居ない。又それは聖書を生みしめたところの歴史的状況に対して、関心をもたぬことをも意味せぬ。それが拒否するところのものは、聖書に誤謬が存在するというその事である。聖書は、『信仰と行為との誤りなき基準』である。」とする。

第六章 救拯 において、「自由主義は救ひを人の中に見出し、キリスト教はそ

<sup>106</sup> メイチェン『キリスト教とは何ぞやーリベラリズムと対比してー』角田桂獄訳 長崎書店 1933 年。

れを神の業の中に見出す。根本的な事とは、罪の為に犠牲を払ふは神ご自身であつて他の者ではないということである。」「救いは絶対的に無償なる神の賜物である。現代自由主義に従えば、信仰は『キリストを師とすること』だ。」と述べる。

第七章 教会 において、信仰告白の規範性の希薄化を嘆く。「長老教会に於ては、凡ての役員が按手禮をうけるとときには、彼等は次の二つを以て始まるところの一聯の質問に「明確」に答へねばならぬ。『汝は旧新約聖書を以て信仰と行為の唯一の誤りなき基準である神の言と信ずるや』『汝は長老教会の信仰告白を聖書が教える教義の組織として真実に受容れるや』然るに厳粛な宣誓をなした直後に於いて、ウェストミンスター信仰告白は謬なき聖書が教へるところの教義の組織を含む物であると言うことと、聖書無謬の教義とを罵り始めるとは。」とする。

半世紀前、保守派の雄であった、ウォーフィールドらは聖書無誤(p16)をとなえた。それに比べ第四章の主張は、無謬説とするのが相応しい。聖書批評学の浸透によるのだろう。第七章の主張は、1903年のWCF改訂と按手時誓約に関する改訂への反感が読み取れる。彼がウェストミンスター神学校を設立するのは本著作の6年後だが、激しい言葉遣いの中に追い詰められていく保守派の姿が読み取れる。

#### 2. 4. 2. カール・バルトによる正統主義批判<sup>107</sup>

彼はまず、正統主義を定義し、「キリスト者の証しの内容を正しく正確に完全に理解しその妥当性を示しその表現・告知の純粹さを求めようとする、入念な努力」として、「それ自身においては善いものである。」と評価するが、「その証しの内容によるキリスト者の実存的規定についての問い」をしっかりと受け止めないならば、「善いものであるのをやめる。」とする。

証しは、「イエス・キリストにおける活ける神がその内容なのだから、証しへと召された人間に必然的に関りを持ち、彼に手を伸ばし、その全存在における彼を徴用し、彼を自由に扱い、彼の生活の中でその個人的解放として反映される。」この事実を無視するなら、「もっとも良心的で真実で厳しい正統主義も、もっとも怠惰な技になってしまうであろうし、そのような正統主義は極めて誘惑的で危険な働きをするであろう。」そして、「早晩、キリスト者の証しの内容についての問いを無視し、誤った答えを示すという結果を、かならず迎え、活きたキリスト者無しのいまわしい正統主義的キリストに、キリスト無しと同様にいまわしい神秘主義的・自

<sup>107</sup> カール・バルト 『教会教義学 和解論 III/3 真の証人イエス・キリスト (中)』井上良雄訳 新教出版社 1986年 pp503-504.



由主義的あるいは実在主義的キリスト者が対立させられ、付随的なものが本質的なものと考えられ、本質的なものが付随的なものと考えられることが、常に起こった。正統主義は、それ自身が呼び出した異端の姿で必ず自分自身を否定し、廃棄し、不可能にせざるをえないのであった。」と、厳しく非難する。キリストが律法学者やパリサイ派の人々を非難された姿が思い浮かぶ程に。

原著 KDIV/3 は 1956 - 1959 年の著作であり、メイチェンの著作から 30 年以上経過したヨーロッパでのものだ。この時代、PCUSA では新正統主義神学が優勢だったが、彼の言う“正統主義”は、キリスト者に内在する“罪”の告発であろうか。

#### 2. 4. 3. リチャード・ニーバー(H. Richard Niebuhr :1894-1962)

『世と戦う教会 The Church Against the World』<sup>108</sup> の序と第三部が彼による。本書が著された 1935 年は、第一次世界大戦（1914-1918 年）の後、大規模な「赤狩り」（1920 年）があり、戦後の好景気から一転して 1929 年に始まった大恐慌は 33 年ころピークに達した。1933 年にはソ連が承認されている。

序 教会の課題 において、「教会は、戦争反対、平和促進計画、民族の同盟、戦争の非合法化協定、国際的な友情関係協会、戦争抵抗者の組織化などを行い、ユートピアの理想を説教した。しかし、多くの者の不毛な生活も少数の者がますます特権を得ることも、止めるとは出来なかった。教会は、『救われるために、私は、何をなすべきか？』と叫ばざるを得なかった。」「教会は、十字架上の人物ではなく、その下に集まる迫害者なのだ。」とし、人文主義・啓蒙主義に影響された自由主義神学が、時代に対して如何に無力であったかを述べる。さらに、「世界的な危機が起きた時、教会は時代についていけず、世の中が近代化しているのに中世のままの旧態依然とした組織であり、文明が科学的になっているのに、教義はそのままだった。」と述べ、根本主義を批判し、「教会の信仰における問題は、資本主義や個人主義哲学や帝国主義に同調しすぎたことによる。この危機は移り行く世によってではなく、変わることの無い神によってもたらされた。教会は文字を礼拝するのではなく聖書に向かうことによって、その答えを聞くことが出来ると知っている。」と述べ、根本主義者の説く聖書観“無誤”を否定し新正統主義の聖書中心主義を主張する。

第三部 教会の自立に向かって において、世俗性に囚われてしまっている教会を記述する。「世俗性は形を変え続け、現代文明においては人は自分自身のために

<sup>108</sup> H. Richard Niebuhr, Wilhelm Pauch, Francis P. Miller, *The Church Against the World*, Willet, Clark 1935 pp 1-13, 123-156.

存在し自身の礼拝の対象と見なすヒューマニズムとして現れ、さらにナショナリズムや資本主義に変装し、下品な製品を崇拜する産業主義となる。」

第三部－Ⅰ．囚われの教会 では、「教会は、極端に肥大化した資本主義に呑み込まれてしまった。金銭欲が悪の根源であることを知っていたが資本主義文明の救済が使命であるかの如くふるまった。富への信仰に幻滅を感じる人に、国家を最高の価値と見るナショナリズムと言う代替信仰が提供されると、それに束縛され機能融合した。さらにそれは、手紙と手紙の著者を混同して拝する、伝統尊重主義への固執により促進された。」と、自由主義神学と根本主義神学があいまって、資本主義に迎合する教会の墮落をもたらしたとする。

第三部－Ⅱ．教会内の反乱 においても両者への批判を止めない。「教会のこのような状況に対して、伝統主義や感傷的言動、あいまいな道德観、専制的な社会機構や階層に対しての追従などへの反感があった。知識人は伝統尊重主義やロマン主義で教会を見限り、廃嫡された階層や人種は教会を資本主義者、民族もしくは国家主義的帝国主義者と非難した。これは世俗化した教会に対する反乱だった。」とする。

第三部－Ⅲ．教会の自立に向かって において、その処方述べる。「教会の自立宣言は、全ての生が神に依存し、神への忠誠が生条件であり、かつ国と力と栄が神に属すると言う自明の真理から始まる。それ以外に教会の世からの自立はあり得ない。「ありてある」方への忠誠こそが、教会存在の唯一の根拠であり、この忠誠の回復こそ真の解放の始まりなのだ。神とイエス・キリストへの忠誠を開始せずに、新しい教会の生を始めることは出来ない。」とする。

ニーバーの著作年は、若くして亡くなったメイチェンの最晩年に当たるが、彼は結論部分において、この論述に同意し得るのではないだろうか。「教会は神とイエス・キリストへの忠誠に帰れ」との主張に異はないはずだ。従って問題はこの中身・帰る先が何でありどこなのかということだ。

本著作の後歴史は第二次世界大戦を経験する。ニーバーの主張は鋭い指摘ながらもロマン主義的な色彩が残っていたとの批判は、まぬかれ得ないだろう。メイチェンは保守派の *The Doctrinal Deliverance of 1910* の、ニーバーは 1924 年 *Auburn Affirmation* の線に立っていると読むことができる。新正統主義神学をもって、「教会は神とイエス・キリストへの忠誠に帰る」とのニーバーの意図が現れている。

#### 2. 4. 4. 保守派の新正統主義批判

デンバー神学校の校長(1956-1979年)および1949年設立の全米福音主義神学会

会長を務めたヴァーノン・グランズ(Vernon C. Grounds)は語る。<sup>109</sup>

彼は、まずバーナード・ラムによる新正統主義の7つの主要命題を引用する。<sup>110</sup>

(1) 自由主義、カトリック主義、プロテスタント正統主義は、神学的に行き止りの袋小路である。

(2) 正統主義者たちの聖書観は(正しい要素を合んではいるが)、大部分間違っている。

(3) 啓示は一つの出来事、出会いであり、格者間— 神と人 —との邂逅である。

(4) 教理は永遠に真理である命題ではなく、可能性である。可能性としての教理は、生きた霊的な経験のうちにとらえられて、はじめて意味をもつ。

(5) 神学的叙述は、本質的に逆説である。

(6) 科学的 — 客観的であることなしに事実である特別な種類の神学的歴史がある。科学的 — 客観的であることなしに事実であるこの種の神学的歴史の出来事は、神話である。

(7) 彼らこそ宗教改革の真実の後継者であって、正統主義者がそうなのではない。まして根本主義者では決してない。

グランズは新正統主義の聖書理解をバルトの著作を引用し、「それゆえ、聖書の証言は聖霊の証言である。聖霊は真に聖書の内容の力である。聖霊によって、聖書は聖書となる。・・・こうして聖書は啓示を仲介し、イエス・キリストを提示する。人間の言という僕のかたちにおいて、聖書は神の言を語る。それに聞く者は聖霊に聞くのである。聖霊に聞きたい者は聖書に聞かねばならぬ。これこそが聖書についての福音主義的原理であり、啓示の証言と仲介に関して語られなければならない普遍的、根本的、自己充足的な事柄なのである。」とする。さらに「これは全く議論の余地がないほどの、聖書と聖霊両方の高遠な評価である。しかし、高遠ではあるが新正統主義の評価は、福音主義を満足させるほど十分に高遠ではない。」と述べる。<sup>111</sup> そして新正統主義の聖書観を、「聖書が神の言であること、すなわち、われわれがそれを聖霊の照明によって自らのものとするかどうかにかかわらず、固定した客観的な規範であることを否定する。彼らの意見によれば、聖書は神が主権的に

<sup>109</sup> ヴァーノン・グランズ「福音主義と新正統主義」井戸垣 啓訳『現代神学入門』聖書図書刊行会 1966年 に第1部として収録 p24.

<sup>110</sup> Bernard Ramm, *The Major Thesis of Neo-Orthodoxy*, *Etymty*, June, 1957, pp. 18-19, 33

<sup>111</sup> グランズ 前掲書 p41 バルトの引用は Karl Barth, *Church Dogmatics*, Vol. 1 *The Doctrine of the Word of God, Prolegomena to Church Dogmatics*, edited by G. W. Bramley and T. F. Torrance, translated by G. T. Thompsen and Harold Knight(Edinburgh: T. & T. Clark, 1956), Prart 2, p133.

われわれに語りかけ、ご自分を啓示することを選びたもう実存的瞬間に、神の言となることができる。もっとはっきり言えば、神の靈感は聖書の属性ではなく、単なる聖書の潜在性、われわれがそれを読むとき、聖書が身につけたりつけなかったりする一つの特徴であるにすぎない。」とする。<sup>112</sup> さらに、聖書の無謬性に関してバルトの著作を引用する。「すべての古代の文学と同様に、旧新約聖書が、われわれにとっては非常に重要な事実と価値の区別、一方における歴史および他方における伝説、伝承の間に少しも区別を認めていないことは、われわれ自身にとってつまづきの一部となっている…神の言は、われわれが伝説または言伝えと呼ばれるべきだと考えているものの形態において、われわれに出会うのであるけれども、聖書においては、それはただ神の言を単純に信じる信仰の問題である。だが、聖書に傷があること、つまりその誤りの可能性は、その宗教的、あるいは神学的内容にまで及んでいる…われわれは、聖書の中の神の言をその他の内容から、無謬の部分と表現とを誤りあるものから、不可謬なものを可謬なものから区別すること、またそうした発見によって、聖書の中にある真正の神の言との出会いを、自分たちのために造り出すことができると考えなくともよいものにされている。聖書のすべての人間の言の可謬性、歴史的科学的な正確さ、その神学的矛盾、その伝承の不確実さ、そして、なかでもとりわけそのユダヤ教的色彩、こうしたものを神は恥とされず、かえってこうした表現をすべてその誤りをもったまま採用し用いられたのであるなら、神が聖書を、そのすべての誤りをもったまま、証言としてわれわれに対して新しくしようとされるときに、われわれは恥じる必要は少しもないのである。」<sup>113</sup>

これに対してグランズは次の様に述べ福音主義者の立場を明確にする。「新正統主義はこのように聖書の無謬性を拒むので、福音主義は新正統主義を拒む。聖書の無謬性への信頼こそが、他のすべてのの教理を守ることのできる唯一の基礎であるから、福音主義は新正統主義を拒否するのである。この点を放棄したら、われわれは客観的神学の基礎を足もとからくずしてしまう。」<sup>114</sup>

正統主義の立場をとるか、ヒューマニズムに徹するかを選択が不可避であり、新正統主義は一時的にこの選択をあいまいにする（程度の）ものだ、と結論する。

グランズは聖書理解の違いから新正統主義を批判する。しかし、1967年信仰告白

<sup>112</sup> グランズ 前掲書 p71. この議論は、「観測を行った瞬間に波動関数が固有値をとる」とする量子力学の観測理論に共通し興味深い。W.ムーア 『シュレーディンガー：その生涯と思想』小林徹郎,土佐幸子共訳 培風館 1995年 pp350-353.

<sup>113</sup> 前掲書 p73,74. バルトの引用は *ibid.*, pp508,509,531.

<sup>114</sup> 前掲書 p76. 脚注 40によればここで無謬と訳されているのは「無誤」が適切か。

の聖書理解(p30-31)には、ニーバー(p41)やバルト(p42)の聖書理解が強く反映している。当時北の PCUSA が新正統主義神学の強い影響下にあったことを示している。

これはハートらの“新正統主義神学が長老教会をダメにした”との批判(p19)に重なる。

## 2. 5. 予定の教理

2. 2 PC(USA)信仰告白史 において「1967年信仰告白はカール・バルト神学が『新現代主義』として PC(USA)に浸透した証拠」との保守派であるハートらの見解(p31)と、ウェストミンスター信仰基準を「最大の難点は『神に見捨てられた者と選ばれた者を完全に分離する』教皇教令の神学で 17 世紀の専制主義や派閥主義を反映している」と批判する見解(p30)の対立を見てきた。

WCF は 「第 3 章 神の永遠の聖定について」において二重予定を語る。特に「三 神の聖定によって、神の栄光があらわれるために、ある人間たちとみ使いたちが、永遠の命に予定され、他の者たちは永遠の死にあらかじめ定められている。」とする。「予定の教理」は、アウグスティヌスに発するとされるが、<sup>115</sup> ローマ・カトリックはトリエント公会議(1545-1563年)において信仰義認を否定して内的義認をとり、<sup>116</sup> 正教会もエルサレム公会(1672年)で信仰義認と予定説を否定しており、<sup>117</sup> ウェスレーはアルミニウス主義に立つ。ドルト信仰基準・ウェストミンスター信仰基準に立つ改革派での強調が際立つ教理だ。

本節において二人の神学者の予定論を考察し、新正統主義の理解を深めたい。

### 2. 5. 1. カルヴァンに見る予定の教理<sup>118</sup>

カルヴァンは、1559年版キリスト教綱要第3篇第20-24章において予定の教理を「神がよってもってあるものを命の希望のうちに取り入れ、他のものに永遠の死を判決として与えたもうたこと」<sup>119</sup> とし、さらに「『神は永遠不変の計画によって、ひとたび救いの内にうけいれようと決意したもうたものらと、他方、滅びに委ね切ろうと決意したもうたものらとを、ともに定めたもうた。この計画は、選ばれた者

<sup>115</sup> A. E. マクグラス『宗教改革の思想』高柳俊一訳 教文館 2000年 p104, 177.

<sup>116</sup> マクグラス 前掲書 p168.

<sup>117</sup> Encyclopedia Britannica Facts Matter, Dositheos, <http://www.britannica.com/EBchecked/topic/169746/Dositheos> 2012.08.13.

<sup>118</sup> 予定論に関して秦の詳細な論述があり参照した。秦貴詞「カルヴァンにおける神の主権的選びと棄却」東京神学大学修士論文 2011年。

<sup>119</sup> ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要 III/2』渡辺信夫訳 新教出版 1964年 3.21.5 p191.

に関する限り、値なしの憐れみに基礎づけられており、人間の価値をいささかも顧慮したものではない。・・・断罪に渡されるものらは、神の正しい、かつ攻めることのできない、しかも把握し得ないさばきによって、命の道をとどされるのである。」<sup>120</sup> とする。さらに「選び」が「人間の行いと関係しない創造に先立つ一方的な恵み、値なしの恵み」<sup>121</sup> であり、その根拠が「キリストにある」とし、「キリストは、よってもってわれわれの選びを直視すべき鏡でありたもう。」とする。<sup>122</sup>

一方「棄却」は「人間の行い - 罪」の故ではなく、<sup>123</sup> 神の永遠の計画「彼らの断罪を通じて、神の栄光が輝く」<sup>124</sup> ためであり、「彼のご意志のほか、いかなる原因をたずねてもならない」<sup>125</sup> とし、「人間の義の尺度をもって、神の義を測るものは、よこしまをなす」とのアウグスティヌスの言葉をもって閉じる。<sup>126</sup>

## 2. 5. 2. カルヴァン後の予定説

マクグラスは以下の指摘をおこなう。<sup>127</sup>

① カルヴァンの後の時代、改革派はルター派やローマ・カトリックに対して自分たちの教理をより体系化する必要に迫られた。ベザは神の予定の布告（二重予定）の上に神学を打ち立て、「キリストの死は全ての人を救う可能性を持ちながら、その死が自分に効力をもつことを妨げない者にたいしてのみ有効である。」と「限定された贖罪」あるいは「特定の救い」の教理をとった。

② 予定説に導かれ、「恩恵の契約」が与えられていると自覚した、改革派教会の集いは自分たちのグループを、新しいイスラエル、神の新しい民であり、神との新しい契約の下にあるとみなした。「恩恵の契約」は神にその民に対する義務を課し、同時に神に対する神の民の（宗教的、社会的、政治的）義務を課した。この神学がニューイングランド移住者を特徴づけた。

この指摘は次の様に解することが出来る。①の教理は、ドルト信仰基準、WCFを通じてOSCに、②の義務はニューイングランドを通じてNSCにより強く受け継がれた。多くの海外宣教団体が組織された(p14,18,19)要因も②によるのだろう。

<sup>120</sup> 前掲書 3.21.7 p197.

<sup>121</sup> 前掲書 3.22.3 p202-203.

<sup>122</sup> 前掲書 3.24.5 p245-247.

<sup>123</sup> 前掲書 3.22.11 p216.

<sup>124</sup> 前掲書 3.24.14 p249.

<sup>125</sup> 前掲書 3.22.11 p217.

<sup>126</sup> 前掲書 3.24.17 p266.

<sup>127</sup> マクグラス 前掲書 p182-184.

### 2. 5. 3. カール・バルトに見る予定の教理

バルトは、「正統主義において、教会の教説中で、予定の概念を用いるのが常であったが、イエス・キリストのことを考えることから遠ざかってしまった。」<sup>128</sup> として論を始める。

「慣習的な受け止め方 — 神は一方の人たちを祝福へ、他方を断罪へあらかじめ定め給う」は論難の余地があり、「神の自己献身（イエス・キリストの中での神の決定）の中に、永遠的な、二重予定、神の恵みの選びを見てとらねばならない。」<sup>129</sup> とし、「神の民（教団）は選びの仲介であるが、選びの対象は（予定された・家族・民族・人類でなく）個々の人間であり、すべてのものが選ばれているのではなく、ひとりびとりの個人がえらばれている。」<sup>130</sup> 「予定された人間は、徹頭徹尾ダメな人間であり、予定は神の自由な慈愛とへりくだりの決断」<sup>131</sup> だとする。

「しかし、彼は選ばれた者として生きることをまったくせず、捨てられた者として悲惨の中に生きている。このような神なき人間こそが、神の選びの対象である。彼が選ばれていることが、イエス・キリストの中に基礎づけられている限り、彼の棄却は脅かしにすぎない。教会は、イエス・キリストを通して無力にされた脅かしと、有効ならしめられた約束を認識し証しする。あなたは、捨てられているのではなく、あなたの棄却をイエス・キリストが担い給うた、むしろ選ばれている。」さらに、「神の前もっての決断を通して規定された生きること、選ばれた者としての彼の生に向かつての移り行きの可能性が入ってくる。」として聖化の道を指摘し、「これが確かな約束の内容」だとする。<sup>132</sup>

確かに、聞く者と聞かない者、信じる者と信じない者、感謝する者と感謝しない者が存在するが、【予定論】は、「古典的予定論のように、『選ばれた者』と『捨てられた者』を分割するのではなく、イエス・キリストを念頭において、そのような分割を否定し、信じない者たちに対してふさわしくないのに与えられた彼らの選びを宜べ伝えるのと同様、信じる者たちに当然値した彼らの棄却を宜べ伝えることによって、また両方の者たちに対して、（その方の中で彼らが確かに選ばれており、捨てられているのでない）ひとりの方を宜べ伝えることによって、分けられた者た

<sup>128</sup> カール・バルト『教会教義学 神論 II/2 神の恵みの選び 下』吉永正義訳 新教出版社 1982年 p6.

<sup>129</sup> 前掲書 p8.

<sup>130</sup> 前掲書 p16.

<sup>131</sup> 前掲書 pp18-19.

<sup>132</sup> 前掲書 pp30-31.

ちを繰り返し呼び集める」のだとする。<sup>133</sup>

「選ばれた者の定めは、自分自身を神によって愛された者とするものであり、<sup>134</sup>それは福音の宣教」<sup>135</sup>である一方、「イエス・キリストにあって起こった選びに対し逆らうことによって自分を神から切り離すところの人間は、『捨てられた』のだが、その存在も神的予定の対象であり、創造と保持の恵みにあずかり永遠の神的恵みの契約の領域に立っている。」<sup>136</sup>「捨てられた者は、福音を明らかにする定めを持っている。それは福音によって否定され克服されるものを明らかにし福音の意図を明らかにすることであり、選ばれた者に対し選びを良く考える契機を与える。このことで捨てられた者は選ばれた者の定めにあずかり、そして信仰に至る定めをもっている。これが、神の言葉は捨てられた人に対して向けられていることの意味だ。」<sup>137</sup>とし、WCFの語る「二重予定」の教理を明確に否定、キリストの恩寵の絶対的支配を主張する。

#### 2. 5. 4. 神の時間、人の時間

前節において、「予定説」を学んだ。この教理は、プロテスタント教会が、カトリック教会の言う「人間の善行を見て神が救う者を決める」を否定した<sup>138</sup>ことに起因すると考えられる。

救済は神の一方向的な業であり「行ない」と言う人間の生における営みに依存しないのならば、それは「誕生—あらゆる行いの開始時点—をもって始まる一人の人の生に先立つ時点（実際には創造に先立つ時点まで遡る）において、神が定めたもうた」との論理展開が考えられる。

ここで問題なのは、「神が定められたもうた時は、誕生に先立つ」として、神の時間を人の時間と同様に、「1次元で一方向に流れる」時間と規定している点だ。

<sup>133</sup> 前掲書 p39.

<sup>134</sup> 前掲書 p196.

<sup>135</sup> 前掲書 p276.

<sup>136</sup> 前掲書 p267-270.

<sup>137</sup> 前掲書 pp 277-283.

<sup>138</sup> カルヴァンに関しては(p45)。バルトは『神論 II/2』p37-66において宗教改革者の「選ばれた者の自己確信」理解を詳述する。「彼らは答えを『重要な差別づけ』すなわち予定論においた。ここで『業』が問題となるが、カルヴァンは『行いは神の内住の印し』と述べたが、『行ない』を主要な証人とはしなかった。しかし、ベザ、ゴマルス、ドルト信仰基準、ヴォレブは選ばれた者の自己証言を経験的自己観察と自己評価の判決としてしまった。キリスト論に基礎づけられた予定論では、『イエス・キリストによる選びの確信は、その恵みを述べ伝える楽しみによって与えられる』とする。



しかし、時間とはいったいなんだろうか。先人の時間論を見たい。

・アウグスティヌスは、「神は『あれ』との御言で世界を造られた。（『告白』11巻5章）神の御言は神とともに永遠である。永遠なものにおいては何も過ぎ去らない。決して静止しない時間において、過去のもは未来のものから追い払われ、未来のもは過去のものから継起し、すべての過去のもも未来のもも常に現在であるものによって造られ、それから流れ出る。（11章）過ぎ去るものがなければ、現在という時間は存在しない。過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しない。現在はただ過去に移り行くことによるのみ時間であり、移りゆかないなら永遠だ。（14章）」<sup>139</sup> と述べ、神の時間（永遠）と人の時間が異質である事を述べる。

・カルバンは、「神の知りたもうところは、『将来』も『過去』もなく、一切は『現在』である。『現在』も単に概念として想定するもの（ちょうど、我々の場合、その記憶が我々の精神の内にとどめられているものが、思いの内にかびでるように）でなく、彼の前におかれたものを現実に眺め識別したもう『現在』だ。」<sup>140</sup> とし、神の時間が永遠であることを述べる。

・波多野精一は、「主體は、『現在』において生き『現在』と眞實の存在とは同義語である。然らば根源的の姿における時は單に現在に盡きるであらうか。」とし、現在の内部構造性を述べる。「現在は過去と將來とを缺くべからざる契機として己のうちに包含する。」ここで、現在が「將來」より絶え間なく来たり、「過去」へ直ちに去るとし『この絶え間無き流動推移が時である。』と、「人の時間」を定義する。

さらに、「若し滅びぬ現在無くならぬ今——即ち永遠——が成立つたと假定すれば、そこで先づ姿を消すは過去であるが、未來も過去と運命を共にせねばならぬであらう。」と永遠が何であるかを述べる。<sup>141</sup> さらに「客觀的實在世界の範疇のうち最も重要なるは實體性と因果性とである。實體性は、上に述べた所より直ちに推測し得る如く、畢竟主體性に外ならぬ。因果性は客體間の聯關意味聯關が實在的聯關に變じた場合に生ずる。すなはち、二つの客體乃至客體群が各別々の實在的中心の表現たる意義を擔ひつつ相聯關する場合には、そこに因果關係が成立つ。」として、<sup>142</sup> 「人の時間」における因果律の成立を述べる。一方「將來と現在との完全なる一致」、「將來の完全なる現在性」こそ永遠性であり、永遠性は時間性を克服し

<sup>139</sup> アウグスティヌス『告白（下）』服部栄次郎訳 岩波書店 1976年 pp100-114 4世紀末の著作

<sup>140</sup> カルヴァン 前掲書 p191.

<sup>141</sup> 波多野精一『時と永遠』岩波書店 1972年改版（元版は1943年） pp3-7.

<sup>142</sup> 前掲書 p59.

完成する。<sup>143</sup> 時の終わりにおいてのみ「永遠は完く顯はとなり得る」と終末における完成を語る。<sup>144</sup>

・パネンベルクは、相対性理論における時空の連結を同時性にあると指摘、時間の非可逆性（一方向性）をエントロピー増大則から述べる。<sup>145</sup> そして「神の永遠においては、記憶や期待は必要とされない。なぜなら厳密な意味でそれ自身が全ての出来事と同時だからだ。<sup>146</sup> 時間は常に被造物の有限性と関連しており、終末論的待望が希望を生む。神が現在と隔たっている過去と将来を克服くださる意味で時間自体は終焉に達しここに神の創造の御業を見る。」<sup>147</sup> とする。

・バルトは人間論において、「人は神によって創造された、当時と今と将来が前後に並び、過去・現在・未来が一つの継承をなしている時間を生きている。一方神は最高に時間的に生き給うかたであり、昨日と今日と明日が互いに入り込み合っている、永遠を生きたもう。<sup>148</sup> イエスの時間は一人の人間の時間であり同時に神の永遠的な時間だ。<sup>149</sup> 新約聖書はこれを終末論的に語る。<sup>150</sup> 神の言葉が肉となり、神の永遠が時間となった故、人間イエスは時間の主であり給う。彼の時間は成就された時間である。<sup>151</sup> 人間的な生活は過去から現在を通して未来へと進んでゆく運動であり、時間的・歴史的関係である。<sup>152</sup> 時間の動きを逆転させることは出来ない。<sup>153</sup> 『時間は至って行き死は近づいてくる』不安<sup>154</sup> は、我々の存在が神の怒りのもとにあることを示す。しかし、この方が終をご自身の身に取られたことは神の自由な恵みであった。あの方が死に給うたことが、神が世に対して示したもうたよきことの総内容だ。」と述べる。<sup>155</sup>

ここで見た 5 人の先人は、「神の時間」の永遠性、「人の時間」の有限性と不可逆

<sup>143</sup> 前掲書 p192.

<sup>144</sup> 前掲書 p207.

<sup>145</sup> Wolfhart Pannenberg, *Systematic Theology Volume 2*, trans. by Geoffrey W. Bromiley, William B. Eerdmans Publishing Company, 1994 pp90-92.

<sup>146</sup> *ibid.*, p91.

<sup>147</sup> *ibid.*, p95.

<sup>148</sup> バルト『教会教義学 創造論Ⅱ/3 造られた者（下）』菅田吉、吉永正義訳 新教出版社 1974年 p5.

<sup>149</sup> 前掲書 p62.

<sup>150</sup> 前掲書 p107.

<sup>151</sup> 前掲書 p162.

<sup>152</sup> 前掲書 p184.

<sup>153</sup> 前掲書 p191.

<sup>154</sup> 前掲書 p346.

<sup>155</sup> 前掲書 pp440-441.

性（因果性）を述べる。

では、聖書はどの様に証言しているのだろうか。

・旧約聖書は神が「思い直された」ことを語る

出エジプト 32 章、エレミヤ 26 章、ヨエル 2 章、アモス 7 章、ヨナ 3 章など

・ロマ書 9:15 「神はモーセに、『わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ』と言っておられます。」において、**Ἐλεήσω**（あわれむ）、**οἰκτιρήσω**（いつくしむ）は共に未来形で語られる

・WCF第3章の引くエフェソ書1:4は「天地創造の前に」と述べ、1:5は「イエスキリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」**προορίσας**（あらかじめ定める）はアオリスト分詞だ。

ここに、WCFは「永遠の定め」の根拠を見ている。しかし、ここでの時間に関する記述は、「人の時間」、すなわち「因果律」に則した記述であり、「昨日と今日と明日が互いに入り込み合っている、『神の時間』」によるものではない。

エフェソ書1:4-5 の証言は「神の定め給うた時」に関するものなのだから、「神の時間」によって読み直すことが求められる。

その一つの読み直しの可能性が、先に述べた『予定の教理』に関するバルトの解釈(p46-47)であろう。

## 2. 6. PC(USA)の歴史は語る

PC(USA)を苦しめる、同性愛の問題は宗教的権威の問題に帰結する。

特定の問題において、教会に対する「神の意思」が何であるかを解釈する宗教的権威がどこにあるかは宗教改革の中心的課題だった。宗教改革者達は明確にカトリック教会の二重源泉説を否定し、単一源泉説「聖書のみ」をとった。しかし、「聖書のみ」を純粹につらぬき、あらゆる権威を排除し聖霊の導きによる自由な個人の私的解釈を尊重したのは、再洗礼派などの急進改革派だけだった。

行政的宗教改革者であるルターやツ빙グリーは、「全てのキリスト者が聖書を解釈する権利をもち、また完全に理解できる」との楽観的立場にたったが、これが幻想であることは、両者の『これはわたしの体である』（マタイ 26:26）の解釈において露呈した。さらに、急進派の混乱を見て「聖書の明快さ」の原理を脇に置いた。聖書の権威理解には「神の言葉そのもの」と「神の言葉を含むもの」とする立場が当時から存在していた。<sup>156</sup>

<sup>156</sup> マクグラス 前掲書 pp195-210. 正統主義に立った C.ホッジ、A.ホッジ、ウォーフィールド

このような歴史的背景の下、長老教会は、聖書の「権威ある解釈」として『信仰告白文』という、権威主義や社会への迎合に堕することなく、しかもなお改革されうる権威ある「真理」を確立した。これは改訂の可能性を有し、現実に対して開いていたので、宗教的権威主義に戻るものではなかったが、歴史上多くの長老教会が WCF を絶対的権威として用いたことから、教義上の標準はしばしば権威主義的になった。<sup>157, 158</sup>

PC(USA)の歴史において、聖書解釈の権威の問題は、信仰告白の改廃や制定その解釈の問題として当初から存在した。(2. 2. PC(USA)信仰告白史 p23-p33) 二つの立場(新派-旧派、NSC-OSC、根本主義-現代主義)の対立は、教派の分裂や離脱をもたらした。(2. 1. PC(USA)通史 p10-p21) しかし、再合同は教会政治によるものであった。

米国長老教会において聖書解釈に関する議論の場は発足以来、大会であったが、1927年大会は重要な決定、「神学的真理の決定権は全国レベル(大会)ではなく、地方レベル(中会)にある」(p18)を行った。これは、「根本主義の5点」(p28)と、それに対抗する「オーバンにおける確認」(p28-29)による混乱を避けるための、教会政治力学による解決であり神学的一致によるものではなかった。

この解決は1970年代まで、北のPCUSAで新正統主義神学が支配的であったことと相まって、有効に機能したように見え、1967年信仰告白も生まれた。しかし、ベトナム戦争後のカウンターカルチャーや社会変革において脆弱さを露呈し、長老教会の衰退が始まった。(p36)

ビュートラーは1999年の論文において、この内部的要因を神学的一致を求めることの欠如にあるとし、次の対応を提案する。

・1983年の合同時、PC(USA)は厳格な南部PCUSの按手誓約を採用し1967年以降、「教えられ」「継続的に導かれる」とすれば良いとされていた誓約を厳格化した。この線を守ること<sup>159</sup> (按手に際し、以下の3つの問いがなされる)

ーイエス・キリストを聖霊によって証言する旧新約聖書を唯一の権威ある普遍的教会の証言とした神の言葉として受容するか

---

らの聖書無誤説もルターの主張した、聖書の明快さに依存する。(p16)

<sup>157</sup> Beuttler op.cit., p243.

<sup>158</sup> 信仰告白の規範性は按手誓約に顕著に現れる。1729年には厳格(p24)であったが、メイチェンは1903年の改訂(p27-28)を厳格さを欠くと非難し(p39)、1967年合同はさらに緩めた。(p20-21) ハートらは『信仰告白集』内の相互矛盾を誓約を緩めることで解決したと指摘する。(p31-32) 1983年の南北合同時には、南部基準を採用し厳格化した。

<sup>159</sup> Beuttler op.cit., p256.

- 聖書が導く改革教会の信仰告白を受容しそれによって神の民を導くか
- 教会の働きにおいて聖書の權威と信仰告白に導かれキリストに服従するか

・1958年北のUPCUSAにおいてWCFを改訂し離婚婚問題を解決した際、新正統主義神学による聖書の読み方がなされた。(p30)これを事例として、神学と教会政治の一致をはかり、教会政治力学に偏した1927年の路線を脱却すること<sup>160</sup>

・中間の人々の活躍を促し、改革教会の信仰の要点に関する神学的一致を目指し、信仰告白が聖書解釈の權威を持つことを明確にすること<sup>161</sup>

しかし、PC(USA)の歴史は、ビュートラー提案の線を歩まなかった。

## 2. 7. なぜ保守的教会は成長するのか<sup>162</sup>

なぜ主流派教会は衰退しているのか。1960年代以降のPC(USA)の長期低落傾向は何に由来するのかは、ケリーの本の表題の裏返しになるだろう。

PC(USA)を、大会、信仰告白、神学から見てきたが、これらはなぜ教会員が去っていったのかを直接的には説明しない。

ケリーは、成長する教会とそうでない教会の特徴を表-2にまとめる。<sup>163</sup>

さらに堀内はケリーの説を、「1960年代になって主流派教会が急速に弱体化し衰退したのは、教会から信徒への要求が減少したことにある。教会は信徒に要求する教えの内容が厳格であればあるほど、信徒を惹きつける力がまし、組織は強化される。主流派は教えの厳格さを緩め、世俗的な社会の文化に寛容な態度をしめし、世俗の文化に迎合するに従って、信徒に対して献身を求める要求が少なくなった」と要約する。<sup>164</sup>「世俗文化に迎合」との指摘は、自由主義に対するR・ニーバーの指摘(p40)に重なる。「神とイエス・キリストへの忠誠」の回復は、神学的議論の末にもたらされるのだろう。強いグループの特徴は、集団内部の強固な連帯感<sup>165</sup>、外

<sup>160</sup> *ibid.*, p251. 聖書理解の違い故、正統主義が新正統主義を否定するのを見た。(p43)ビュートラーは修正案にある、「聖書に忠実かつ教会の歴史的告白の基準と一致した生活」から「聖書の權威の下にイエス・キリストに従い、そして教会の告白的伝統に導かれる」への変更(聖書からイエス・キリスト)を、權威の存在を「客観的で公的なものから主観的で私的な経験へ」、「聖書のみ」を個人の良心の問題に変更することだと解説する。

<sup>161</sup> *ibid.*, p255.

<sup>162</sup> Dean M. Kelley, *Why Conservative Churches are Growing - A Study in Sociology of Religion*, Harper & Row, Publishers, 1972.

<sup>163</sup> *ibid.*, p84.

<sup>164</sup> 堀内 前掲書 p265.

<sup>165</sup> ウェイン・A・ミークス 『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的考察』加藤久夫監訳 布川悦子 挽地茂男訳 ヨルダン社 1989年 p205.

部との境界線<sup>166</sup>、自らの隠語<sup>167</sup> などにおいてパウロの教会形成に似る。成長する教会は、初代教会の熱気を内に持っている教会なのではなからうか。

根本主義者の去った PC(USA)はエキュメニカルな教会であり、多元主義的であり、会議主義であり、非カリスマ的である。1960 年代 UPCUSA は新正統主義神学に立ったが、バルトが「聖書を新聞の上で読む」と言ったように、聖書を現代に読み直すことに誠実であり、社会の抱える課題に責任感をもって答えようとする。そして、1/10 献金が強調されることはない。

ハートらは、「PC(USA)はエキュメニカル運動の結果、長老教会のアイデンティティを失い、教会で成長する子供が成年期に達した時、長老教会員として留まる必然性を失った。」と指摘する。<sup>168</sup>

人々は何をもとめて教会に来るのだろうか？

多くの者は、高邁な神学ではなく、高尚な社会の救いでもなく、(自分の)教会への帰属意識と(自分の)救いの実感にあるのではないだろうか。<sup>169</sup> しかし、これは PC(USA)の担おうとする社会的責任を否定するものではない。

担ない切れずに苦しんでいる様に見えるものの、「PC(USA)において十分でない補うべき課題」と読むことができる。

表-2 強いグループ、弱いグループ

		目標	統治	対話
強いグループ	社会的強さの証拠	1. コミットメント - 忠実な人々の集団のために、ステータス、所有物、安全性、生命自体、を犠牲にする意欲 - 全体の要求に対する全体での反応 - グループの結束	2. 訓練 - 質問なしにリーダーシップの(カリスマ的)命令に従う意欲 - グループを去るのではなく違反に対する制裁を受ける意欲	3. 宣教の熱意 - 自ら経験した救いの経験、「福音」を他の人に伝える熱意 - 沈黙させられること(使徒 5:26)を拒否 - 型にはめられ高度に記号化された内部対話

<sup>166</sup> 前掲書 p226.

<sup>167</sup> 前掲書 p245.

<sup>168</sup> Hart et al., op.cit., Part 13.

<sup>169</sup> 棚村恵子『アメリカ心の旅 自由と調和を求めて』日本基督教出版局 1998年 p112. 「主流派と言われる進歩的諸派は圧倒的に中産階級以上でしめられ、その上、大幅な会員減に悩んでいる。この事実は『個人の魂の救いは社会の救いなしにありえない』という進歩派の命題に再考をせまるのではなからうか。」と記す。

部 バ プ テ ス ト 教 会 な ど		- グループの目的を踏まえた個人の目的の明確化		(隠語) - 陽気さ
	構 成 的 特 長	4. 専制主義 - 「自分たちだけが真理を持っており、他の人は誤っている」との確信 - 説明することの意味と価値を認めない閉鎖性 - 単一の価値体系への無批判・無思慮な帰属	5. 一致 - 逸脱や異議の不寛容 - はみ出し者の除去 - 親密さを共有する傾向(クエーカーの服装および平易な話) - グループの告白や批評 - 分離主義	6. 狂信 (流出>流入) 殺到あるいは隔絶 - 「語るだけで聞かない」 - 「自身を世界から汚点なくしておく」 - 修道院
弱 い グ ル ー プ P	甘 さ の 特 徴	7. 相対主義 - 誰も真理を独占していないという確信; 洞察はすべて部分的 - 多くの価値や実現性のため様々なモードへの関心(宗教だけでなく) - 批判的で慎重な外観	8. 多様性 - 個性の尊重(誰でも「賜物を活用すべきだ」) - 異端裁判はない; 破門はない; 誤りへのグループ告白に恥をかかせない - リーダーシップは制度化されカリスマ的でない	9. 対話 - 異なる洞察を交換し合い、分れる意見を検討する - 部外者を批判するのではなくむしろ感謝する。 (流入>流出)
C U S A な ど	社 会 的 弱 さ の 証 拠	10. なまぬるさ - 「私とあなたが真理の一旦を持つなら、なぜどちらかが犠牲にならなければならないのか」 - 単一の価値感やある領域での実現のために全てを犠牲にする事への抵抗 - 重要な価値感が危うくなる場合でさえ優柔不断	11. 個人主義 - 疑いを抱かず従順を求めることを不本意とする - 一致よりも個性を重視 - 規律? 何のために? - グループの要求を迷惑視するのではなく尊重する	12. 控えめな態度 - 人の個人的所信を表明し他者にそれを説得することのためらい - 伝道団体の必然的崩壊 - グループ内での確信や精神的な洞察の有効的な共有はない

### 3. PC(USA)の将来

2012年1月リベラル化するPC(USA)を嫌い、Evangelical Covenant Order of Presbyterian(ECO)が分離独立した。ECOはPC(USA)の『信仰告白集』を、「ここに集められた告白は、神学的に正確で教会に適しており組織的にも適切」<sup>170</sup>としており、OPCやPCAとは一線を画するようだ。

#### 3. 1. 220回全国大会(2012年)

2012年6月30日から7月7日までPC(USA)第220回大会がペンシルバニア州ピッツバーグで開催された。主要議題は同性婚(Item 13-04 Civil Union and Christian Marriage)に関する『規則集』(W-4.9000)改訂であり、代表的な3つの意見をめぐり長時間に渡る討議がなされた。<sup>171</sup>

1. 聖書は結婚に関し明確に「男女間の契約」と述べており変更してはならない  
2. この問題で苦しんでいる人々がいる。結婚の定義を「二人の人間の間の契約」と変更する。聖書は全体として読まれるべきである。奴隷制、女性の按手、同性愛者の按手問題などに対処した歴史を振り返る必要がある

3. 信仰告白集に収録されている、ハイデルベルク信仰問答 問108、第二スイス信条「結婚」、WCF「結婚と離婚に関して」、1967年信仰告白「社会との和解」これらは全て結婚は「男女の間」としている。『規則集』における結婚の定義を変える場合、関連する信仰告白を中会の2/3以上の賛成をもって変更する必要がある  
討議に続く採決の結果、2.の変更案は308対338で否決された。<sup>172</sup>

他の注目すべき案件として次ぎの2点がある。

1. 次の10年間に1001以上の礼拝共同体を創設する運動が承認された。

これは既存の教会の伝道が充分でない、新しい世代、新しい住民および新しい人々と共に礼拝共同体を造っていくため、既存の概念に囚われずに戦略的方法をとるとする。<sup>173</sup> ケリーの指摘(p52-54)に対する一つの回答であろう。

<sup>170</sup> The Fellowship Theology Project, <http://fellowshippres.wpengine.netdna-cdn.com/wp-content/uploads/Theology10.pdf> 2012.06.15.

<sup>171</sup> 13-04 On Amending W-4.9000, Marriage - From the Presbytery of Hudson River, <http://pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3761> 2012.07.20.

<sup>172</sup> Churchwide pastoral letter from the 220th General Assembly (2012), July 9, 2012 <http://www.pcusa.org/news/2012/7/9/churchwide-pastoral-letter-220th-general-assembly/> 2012.08.14.

<sup>173</sup> 1001 Worshipping Communities, <http://www.onethousandone.org> 2012.08.14.



2. 大会代議員に若者 (Young Adults: Under age 36)を増やす方策が議論された。220 回大会においても、若者と神学生 179 名 (代議員は 688 名) がアドヴァイザーとして参加し発言権が与えられ、代議員に先立って投票しその結果を参考に代議員投票が行われる仕組みがとられている。これは、会員数減少、なかでも若者の PC(USA)離れに対する真剣な取組みと評される。「子供が成年期に達した時、長老教会員として留まる必然性を失った。」との指摘(p53)に対応する試みであろう。

おわりに

「元気をなくしている日本の教会の進むべき道」への示唆を求めて、本論文の制作にとりかかったが、そこで見たのは PC(USA)の重荷に苦しむ姿であった。しかし、その時代にあって聖書を通して神の御旨を正しく聴く、そしてそのために信仰告白の解釈、改訂、採用を真剣に議論し、さらにその具現化である『規則集』を改訂していく試みが常にあった。その真剣さ故に、聖書の読み方ひいては福音の理解に関する対立が止まなかったし、今も止まない。

1950年代北部の UPCUSA において、新正統主義神学が聖書理解を主導した。(p44) 現代においても、神学に基づいた全体教会 (教団) と中会における徹底的な議論と、それを礼拝を中心とした各個教会の中で受け止めていく対応が必須だ。

翻って、日本の長老教会の歴史に (教団内にあり長老教会の伝統を持つ教会にとつては、50 年だけの歴史だが) これだけ真剣な神学討論があったのだろうか。

旧日本基督教会は簡易信条主義をとった。植村は「化石然たる信条を固守し、将来に争いを起し、分裂を生ずるの種子をこの伝道の春に播き置かんとするに至りては、余輩ますますその不可なるを知る。」「日本国キリスト教徒は、その信条をなるべく自由寛大にして十分に進歩の余地を与え、協和の根基を固うせざるべからず。」と述べている。<sup>174</sup> 日本基督一致教会時代の混乱から学んだのであろうが、その後の歴史から見れば、1927 年 PCUSA 大会の決定同様「教会政治力学」によるものとのそしりを免れない。簡易信条のみに頼ることは、「正しくは有るが聖書を時代の中で読み直す導き手」として弱さが残り 2000 年の間教会を発展させてきた、神学論争の積極的側面を切り捨ててしまっている。芳賀は「信仰告白は教会的伝統の成熟度を窺い知るバロメーターである。」と述べている。<sup>175</sup>

<sup>174</sup> 植村正久『植村正久著作集』6巻 新教出版社 1967年「信条制定に関する意見」p111-112.

<sup>175</sup> ヤン・ロールス 前掲書 (芳賀力訳) 訳者あとがき p539.

文献表<sup>176</sup>

## 1 次史料

### 和文

・『信條集 後篇』新教出版社 1957年。

### 欧文

－大会議決事項の中間承認投票最終集計結果。

<http://www.pcusa.org/resource/ga219-voting-tallies-proposed-amendments/> 2012.04.03.

－大会議長(Moderator of General Assembly)から PC(USA)所属全教会宛ての手紙。

<http://www.presbyteryeasttn.org/documents/10-AchurchwideltrFINAL050511.pdf>

2012.04.06.

－大会書記長(Stated Clerk of General Assembly)発表による 2010 年度統計。

<http://www.pcusa.org/news/2011/7/1/stated-clerk-releases-pcusa-2010-statistics/> 2010.12.30.

－1001 Worshipping Communities. <http://www.onethousandone.org> 2012.08.14.

－10-02 CONFSSION OF BELHAR On Amendment The Book of Confessions.

<http://www.presbyteryeasttn.org/documents/ProposedBookofAmendmentsPart2Belhar.pdf>

2012.04.12.

－219th General Assembly (2010). <http://ga219.pcusa.org/> 2011.10.21.

－219th General Assembly(2010), Civil union and marriage issues questions and answers.

<http://ga219.pcusa.org/news/2010/7/14/civil-union-and-marriage-issues-questions-and-answ/>

2010.12.29.

－13-04 On Amending W-4.9000, Marriage - From the Presbytery of Hudson River.

<http://pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3761> 2012.07.20.

－Church wide pastoral letter from the 220th General Assembly (2012) , July 9, 2012.

<http://www.pcusa.org/news/2012/7/9/churchwide-pastoral-letter-220th-general-assembly/>

2012.08.14.

－Book of Order - *The Constitution of the Presbyterian Church (U.S.A.) Part II 2009/2011*,  
The Office of the General Assembly, 2009.

－CONFSSION OF FAITH OF THE CUMBERLAND PRESBYTERIAN CHURCHES.

<http://www.cumberland.org/gao/confession/confess.htm#1883%20Introduction> 2014.04.26.

---

<sup>176</sup> ネット上の資料(史料)は、著者、資料名、資料日付、URL に加えて資料閲覧日を記した。e 閲覧日は、資料自身の日付との混同を避けるため、(年. 月. 日.) で表記している。PC(USA)の各種記録、歴史的著作や説教、神学論文など非常に多くの資料がネット上にある現状に驚かされる。「燭台の上に置かれたともし火」だ。

- Homosexuality and Christian denominations, *The Presbyterian Church (USA) & same-sex unions, from 1991 to GA preparations in 2001*.  
[http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru5.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru5.htm) 2010.12.31.
- Homosexuality and Christian denominations, *The Presbyterian Church (USA) & same-sex unions, from the 2000 GA until 2003*. [http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru5a.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru5a.htm) 2010.12.31.
- Ordination Standards. [www.pcusa.org/media/uploads/ga219-photos/aib-2010-forprint.pdf](http://www.pcusa.org/media/uploads/ga219-photos/aib-2010-forprint.pdf) 2011.04.11.
- Orthodox Presbyterian Church, *American Revisions to the Westminster Confession of Faith*.  
[http://www.opc.org/documents/WCF\\_orig.html](http://www.opc.org/documents/WCF_orig.html) 2011.12.29.
- PC(USA) relaxes constitutional prohibition of gay and lesbian ordination.  
<http://www.pcusa.org/news/2011/5/11/pcusa-relaxes-constitutional-prohibition-gay-and-l/> 2012.04.03.
- Posts Tagged, *Gardiner Spring Resolutions (1861)*.  
<http://continuing.wordpress.com/tag/gardiner-spring-resolutions-1861/> 2012.06.04.
- Reformed Church in America, the Belhar Confession,.  
<https://www.rca.org/sslpage.aspx?pid=304> 2012.04.12.
- Religion: Dispute over the Deity off Christ, TIME Magazine U.S. , Feb. 18,1981.  
<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,954683,00.html#ixzz1yKePftAg> 2010.09.22.
- Session Resolution First Presbyterian Church, Houston.  
<http://www.fpchouston.org/downloads/items/28.pdf> 2010.09.21.
- The Auburn Affirmation, PCA Historical Center, Archives & Manuscript Repository for the Continuing Presbyterian Church. <http://www.pcahistory.org/documents/auburntext.html> 2012.05.30.
- *The Constitution of the Presbyterian Church(U.S.A.) Part1 Book of Confessions*, The Office of the General Assembly, Louisville, 2007.
- The Fellowship Theology Project.  
<http://fellowshippres.wpengine.netdna-cdn.com/wp-content/uploads/Theology10.pdf> 2012.06.15.
- The Final Report of the Special Committee to Study Issues of Civil Union and Christian Marriage to the 219th General Assembly (2010) Presbyterian Church (U.S.A.).  
<https://www.pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3333&promoID=168> 2010.12.30.

－The Final Report of the Special Committee to Study Issues of Civil Union and Christian Marriage to the 219th General Assembly (2010) Presbyterian Church (U.S.A.).

<https://www.pc-biz.org/Explorer.aspx?id=3335&promoID=170> 2010.12.30.

－The Gardiner Spring Resolution, PCA Historical Center Archives & Manuscript Repository for the Continuing Presbyterian Church.

<http://www.pcahistory.org/documents/gardinerspring.html> 2012.06.04.

## 2次史料 : 宗教史家、歴史家による著作、事典

### 和文

・青木保憲『アメリカ福音主義の歴史 聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』明石書店 2012年。

・岡田稔『ウェストミンスター信仰基準』新教出版社 1994, 解説と付記。

・河野博子『アメリカの原理主義』集英社新書 2006年

・棚村恵子『アメリカ心の旅 自由と調和を求めて』日本基督教出版局 1998年。

・棚村重行「二つの福音は山河をこえて」『神学 73号』教文館 2011年。

・棚村重行『二つの福音は波濤を越えて－十九世紀英米文明世界と「日本基督公会」運動および対抗運動』教文館 2009年。

・棚村重行「恩寵と自由意思の逆説性喪失 (パラドックス・ロスト)」『神学』70号 2009年。

・テリー・シャイボ事件 <http://www.cubeny.com/catch03-4-05.htm> 2012.07.30.

・堀内一史『アメリカと宗教』中公新書 2010年。

・マクグラス A. E. 『宗教改革の思想』高柳俊一訳 教文館 2000年。

・増井志津代「多様と統一：植民地時代アメリカの宗教」。

<http://www.info.sophia.ac.jp/amecana/Journal/17-5.htm> 2012.05.15.

・マッキム ドナルド・k・編『リフォームド神学事典』いのちのことば社 2009年。

・ミークス ウェイン・A『古代都市のキリスト教－パウロ伝道圏の社会学的考察』加藤久夫監訳 布川悦子 挽地茂男訳 ヨルダン社 1989年。

・森孝一「メインライン教会と新宗教右翼」『基督教研究』京都同志社大学神学科内基督教研究会 第48巻 第2号 1987年。

・森本あんり『アメリカ・キリスト教史－理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社 2006年。

・ロールス ヤン『改革教会の信仰告白の神学』芳賀力訳 一麦出版社 2000年。

欧文

- Ahlstrom, Sydney E. *Theology in America The Major Protestant Voices from Puritanism to Neo-Orthodoxy*, Yale Univ. 1967.
- Barnes, Albert. *HE EPISTLE TO THE ROMANS - Chapter 5 - Verse 12*, 1835.  
<http://www.ccel.org/ccel/barnes/ntnotes.ix.v.xii.html> 2012.06.06.
- Beuttler, Fred W. *Making Theology Matter: Power, Polity and the Theological Debate over Homosexual Ordination in the Presbyterian Church(U.S.A.)*, Review of Religious Research, 1999, Vol. 41.
- Encyclopedia Britanica Facts Matter, Dositheos.  
<http://www.britannica.com/EBchecked/topic/169746/Dositheos> 2012.08.13.
- Fink, Roger. and Stark, Rodney. *The Churching of America 1776-2005 - Winners and Losers in Our Religious Economy*, Rutgers University Press, 2005.
- Hart, D. G. and Muether, John R. *New Horizons Turning Points in American Presbyterian History*. <http://www.opc.org/> 2010.08.10.
  - Part 4: *A National Presbyterian Church, 1789*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=33](http://www.opc.org/nh.html?article_id=33) 2012.05.15.
  - Part 6: *Old School Presbyterianism, 1838*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=21](http://www.opc.org/nh.html?article_id=21) 2012.05.23.
  - Part 7: *The Reunion of 1869*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=13](http://www.opc.org/nh.html?article_id=13) 2012.05.23.
  - Part 8: *Confession Revision in 1903*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=17](http://www.opc.org/nh.html?article_id=17) 2012.05.23.
  - Part 9: *The Special Confession of 1925*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=17](http://www.opc.org/nh.html?article_id=17) 2012.06.01.
  - Part 10: *1936: A Continuing Presbyterian Church*.  
[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=9](http://www.opc.org/nh.html?article_id=9) 2012.06.08.
  - Part 11: *The Confession of 1967*. [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=59](http://www.opc.org/nh.html?article_id=59) 2012.06.08.
  - Part12: *1973: The Presbyterian Church in America*.  
[http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=65](http://www.opc.org/nh.html?article_id=65) 2012.06.19.
  - Part13: *Presbyterian Reunion in 1983.*, [http://www.opc.org/nh.html?article\\_id=290](http://www.opc.org/nh.html?article_id=290) 2012.06.20.
- Kelley, Dean M. *Why Conservative Churches are Growing - A Study in Sociology of Religion*, Harper & Row, Publishers, 1972.

- Larson, Viola. *Four reasons the PCUSA should not adopt Belhar Confession*,
- The History of the Polity of the Gay and Lesbian Ordination and/or Installation, and Same-Gender Blessings and Marriage Debates in the Presbyterian Church(U.S.A.) 1983-2009, University of Pretoria.  
<http://upetd.up.ac.za/thesis/available/etd-07042009-213526/unrestricted/05chapter5.pdf>  
2012.06.27.
- The Layman Online <http://www.layman.org/news.aspx?article=27188> 2010.04.12.
- The Presbyterian Church (USA) and gay/lesbian ordination, Events during 2006.  
[http://www.religioustolerance.org/hom\\_pru17.htm](http://www.religioustolerance.org/hom_pru17.htm) 2010.12.31.
- The Presbyterian Family Connections.  
<http://www.history.pcusa.org/images/history/connection.pdf> 2012.05.10.
- Marlowe, Michael D. *THE WESTMINSTER CONFESSIOIN OF FAITH, 1996 MAJOR CHANGES OF THE SAVOY DECLARATION*.  
<http://www.bible-researcher.com/wescoappa.html> 2012.05.10.
- Marlowe, Michael D. *THE WESTMINSTER CONFESSIOIN OF FAITH, 1996*.  
<http://www.bible-researcher.com/wescon01.html#intro> 2011.12.06.
- Marsden, George M. *Fundamentalism and American Culture New Edition*, Oxford University Press, 2006.
- Moorhead, James. *Mainstream Presbyterians: Putting the Pieces Together Again after the Fundamentalist Controversy*, Journal of Presbyterian History Volume 86, Number 2 - Fall/Winter 2008. [http://history.pcusa.org/news/releases/2011/times\\_of\\_controversy/jph862\\_text%20final\\_moorhead.pdf](http://history.pcusa.org/news/releases/2011/times_of_controversy/jph862_text%20final_moorhead.pdf) 2012.01.31.
- New World Eencyclopedia, *Westminster Confession*.  
[http://www.newworldencyclopedia.org/entry/Westminster\\_Confession](http://www.newworldencyclopedia.org/entry/Westminster_Confession) 2012.04.12.
- Noll, Mark A. *New Heaven Theology*, Bible Religious Information Source web-site.  
<http://mb-soft.com/believe/txc/newhaven.htm> 2012.06.05.
- Ramm Bernard, *The Major Thesis of Neo-Orthodoxy, Eteytmty*, June, 1957.
- Tracy, Joseph. *The Great Awakening, a history of the revival of religion in the time of Edwards and Whitefield*, 1845 reprinted by Arno Press & The New York Times, 1969.
- Winter, R. Milton. *Division & Reunion in the Presbyterian Church, U.S. VI*.  
<http://www.history.pcusa.org/resources/jph/2000/spring/DivisionAndReunionPCUS.html>  
2012.07.27.

## 2次史料 : 説教と神学思想家の著作

### 和文

- ・アウグスティヌス『告白（下）』服部栄次郎訳 岩波書店 1976年。
- ・植村正久『植村正久著作集』6巻 新教出版社 1967年「信条制定に関する意見」。
- ・カルヴァン『キリスト教綱要 Ⅲ/2』渡辺信夫訳 新教出版 1964年。
- ・グランズ ヴァーノン「福音主義と新正統主義」井戸垣 啓訳『現代神学入門』聖書図書刊行会 1966年 第1部。
- ・ジャンセン ウェイン・A「南アフリカから私たちへの贈り物」『神学』70号 2008年。
- ・秦貴詞「カルヴァンにおける神の主権的選びと棄却」東京神学大学修士論文 2011年。
- ・波多野精一『時と永遠』岩波書店 1972年改版（元版は1943年）。
- ・バルト『教会教義学 創造論Ⅱ/1 造られたもの 上』菅岡吉、吉永正義訳 新教出版社 1973年。
- ・『教会教義学 創造論Ⅱ/3 造られた者 下』菅岡吉、吉永正義訳 新教出版社 1974年。
- ・『教会教義学 和解論Ⅲ/3 真の証人イエス・キリスト 中』井上良雄訳 新教出版社 1986年。
- ・『教会教義学 神論Ⅱ/2 神の恵みの選び 下』吉永正義訳 新教出版社 1982年。
- ・ムーア W. 『シュレーディンガー: その生涯と思想』小林徹郎、土佐幸子共訳 培風館 1995年。
- ・メイチェン『キリスト教徒は何ぞやーリベラリズムと対比してー』角田桂獄訳 長崎書店 1933年。

### 欧文

—Barns, Albert. "*The Way of Salvation*" と題する 1829 年の説教シリーズ。

<http://www.biblestudytools.com/classics/barnes-way-salvation/> 2012.06.07.

Barnes' New Testament Notes.

<http://www.biblestudytools.com/classics/barnes-way-salvation/sermon-vii.html> 2012.06.07.

—Chun, Dan. *Independence Day Sermon*, 2012.

<http://www.fpchawaii.org/notes/fpcsermon070112.pdf> 2012.07.10.

—Hodge, A. A. Warfield, B. B. *The Presbyterian Review* 6 April 1881,

<http://scdc.library.ptsem.edu/mets/mets.aspx?src=BR188126&div=1&img=13> 2012.06.14.

—McKim, Donald K. *More Presbyterian Questions, More Presbyterian Answers*

- *Exploring Christian Faith*, Geneva Press, 2011.

—Niebuhr, H. Richard, Pauch. Wilhel, Miller, Francis P. *The Church Against the World*, Willet, Clark 1935.

—Ottati, Douglas F. *Theology for Liberal Presbyterians and Other Endangered Species*, Geneva Press, 2006.

– Pannenberg, Wolfhart. *Systematic Theology Volume 2*, trans. by Geoffrey W. Bromiley, William, B. Eerdmans Publishing Company, 1994

– Taylor, Nathaniel W. *To Make Himself A New Heart, Practical Sermons by Nathaniel W. Taylor, D. D., American Religious Thought of the 18th and 19th Centuries*, edited by Bruce Kuklick, Garland Publishing, Inc., 1987.

– Warfield, Benjamin B. *Darwin's Arguments against Christianity and against Religion*, *Homiletic Review* (January 1889): 9-16. [reprinted in *Selected Shorter Writings of Benjamin B. Warfield*, vol II. Nutley, NJ: Presbyterian and Reformed, 1973.]

<http://www.bibleteacher.org/BBW3.htm> 2012.05.25.